

英語インテンシブの10年：成果検証と将来展望

竹田津 進

1. はじめに

何びともいまだかつて航海したことのない大海原へ向けて出帆する船長の心境。英語インテンシブが始まった2005年春頃の英語教員の心理を、少々大袈裟に表現するとこういうことになるであろうか。語学教育は英語と中国語に特化するという県当局の方針のもと、2年程の準備期間ののち、英語インテンシブコースが発足したのであった。

本学では入学試験で英語が必須科目になっておらず、国公立大学では数少ない英語苦手な学生の駆け込み寺と揶揄された時代が、流通学科が創設され、長崎県立大学と改称された平成3年から続いていた。英語教育にとっては順風満帆とは言えない学内環境があったのである。そういう中で、果たして英語の優秀な学生が集まり、期待されるだけの成果が得られるであろうかという不安と一縷の望みを胸に、このコース（途中からプログラムに改称）がスタートしたわけである。2004年秋頃、県立大学あり方検討委員会で、このコースの目標値がTOEIC 650点に決まったというのも、英語教員の懸念に拍車をかけていた。2005年以前の数年間、学内TOEICを実施してきて、600点でさえ、高校時代に一年間の留学経験がある学生を除き、事実上皆無という、本学学生の英語力を見てきている英語教員には、さらに50点上積みした目標とは、エベレストに登頂せよ、というようにも聞こえた。シーボルト校国際交流学科の目標値が600点ということに鑑みれば、無謀としか言いようのない目標値であったとしか言いようがない。

(6年目に目標値が600点に下げられたのは、遅きに失した感は否めないが、適切な判断であったと言える。)

しかも、このコースが始まってまもなく、650点の前に「全員」を入れてほしいという事務局の要請は、当然ながらお断りしたが、成果がほしいとか、そのためにはただ闇雲に高い目標にしたいとか、そういう事業的観点のみの発想ではなかったか。学生を苦しめることになりはしないか、教員に過度の負担にならないかというような教育的、人間的配慮があったかどうか、疑問に思われてならない。

旧シーボルト大学において、TOEICの点数をもとにして体系的に科目を並べるというカリキュラムを事務局主導で実施して、うまくいかなかったという前例がすでにあったことは、第一回FD研修会の際に、シーボルト校の英語教員から状況説明があっただけに、その教訓がもし生かされていなかったとしたら、それは遺憾なことである。また、経済学部における卒業生の学士力が担保されているかどうかという議論もされずに、英語の目標値のみに血道をあげるというのも不可解な話であったと思う。

そういう経緯で始まった英語インテンシブコースであったが、これまで中期計画の各年度の簡潔な報告、2009年に学長裁量研究としての、それまで3年間の報告、2012年に示したA4版1ページの非公式な成績報告書以外に包括的な報告はなく、その活動や成果については、ある意味、ベールに包まれていたと言ってもよいかもしれない。それ故、ほとんど成果が出ていないという印象しか与えていなかったきらいがあったことは確かである。2012年の報告書を見て、「結構やっているじゃないですか」というコメントをしてくれた教員もいたからである。

英語インテンシブも今年の4年生が最後の年にあたる。これまでの活動、成果や実績を報告書にまとめることは、このプログラムに関わった者の責務であると考え、通算で8期生、10年間の英語インテンシブについて報告したいと思う。

なお、ここで感謝の言葉を一言申し上げなければならない。それは、経

済学部において、最初は20単位、4年目からは24単位という、英語関係学科にも負けないほどの、英語に特化したコースを立ち上げ、英語が好きでまた得意な選ばれた40数名の学生を10年にわたり毎年指導できたことは、教師冥利につきることであつたと思う。それについては有意義で貴重な経験をさせていただいたわけであり、篤く感謝を申しあげたい。

2. 英語インテンシブの概要

英語インテンシブが発足した経緯について、どういう根拠のもとにインテンシブのカリキュラムを構築したか、またその内容について以下説明する。その記述は、すでに報告した学長裁量研究の文章を¹⁾、若干の字句の修正をした上で再掲載している。

2.1 コース設置の趣旨

英語が国際的な共通語としてますます重要性を増してきていることは多言を要しない。文科省も2002年7月「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」を発表、さらに2003年3月に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定し、実際の施策に取り組み始めている²⁾。

本学の学生についても、社会に出てからそれ相応の活躍をするために、在学中に英語の力をできるだけ高めていくことは大事なことであると思われる。こういった社会情勢や、また県立大学あり方検討委員会による、英

¹⁾『学生の資質・能力を高める大学教育の創出』学長裁量研究論文・報告集、第9章「インテンシブコースを取り入れた英語教育」(2007年)。

²⁾慶應義塾大学藤沢キャンパスにおける外国語教育は、使える外国語教育の実践例として興味深く参考にはなる(関口一郎『学ぶ』から『使う』外国語へー慶應義塾藤沢キャンパスの実践』集英社新書、2000)。英語を使える生徒を作り出すためにはまず教員の再教育が必要という信念から、熊本県の中学高校の英語教員の研修を1970年から20年余りに渡って実施された熊本大学名誉教授の福田昇八氏による実践活動がある。その報告と氏の論考が『語学開国』(大修館書店、1991)にまとめられている。これは英語教員の再教育の問題だけでなく、英語教育に関する氏の長年の考察、洞察が随所にあり、英語教員には必見の文献と言える。

語と中国語を中心に特化した外国語教育をめざすという提案を踏まえて、インテンシブコースという英語を集中的に学習するコースが設置されることになった。

全学生に対して、いわゆる「使える英語」の習得を目指すのは現実的ではないし困難であるので、一部の意欲のある学生に対して、インテンシブコースで体系的なカリキュラムに沿って学習する態勢をつくっていく方策を考えた。1学年のうち1割弱の、意欲があり、目的意識も高い学生に対して、学力を診断し志望の動機を聞いたうえで選抜し、このコースで履修してもらうこととした³⁾。

本学では英語が必修6単位であるが、さらに14単位を要卒単位として認定し、合計20単位の科目を体系的に配置し、効率的に達成感のある英語習得をめざせるようにした。授業時間数は多いにこしたことはないのであるが、大学では専門科目はもちろん、全人的な教育のためには教養科目の学習もおろそかにはできないので、20単位での対応策を考えた。このコースに入ったあと半期ごとの離脱や新たな参加を可能にし、また学生に単位取得上不利が生じないような配慮をした。

2.2 基本方針

以下の基本的方針をもとにしてこのコースのカリキュラムを構築した。

- (1) 実践的英語力をつける。英語を理解し受容するだけでなく、高い発信能力をめざし、いわゆる「英語を使える」人材を育成する⁴⁾。

³⁾ 「英語を進んでやりたい人、また英語ができなければ困る立場にある人、そして将来そのような職業につくことを望む人を選んで、この人々にかんがいの努力を強いるということを始めないと、いつまでも英語が「できる」人が生まれない」というような鈴木提言が妥当なところではなかろうか(鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書, 1999: 118)。

⁴⁾ 「英語を使える」ということがどういうことかという定義付けもされないままに使われているきらいはある。鳥飼の論考(『大学教育の哲学』『英語教育』2004年7月号, 大修館書店)は、「理念なき大学の英語教育(p. 8)」への警鐘であり、大学英語教育関係者にとって参考すべき文献のように思われる。松原惇子『「英語できます」』(文春文庫, 1993)は「英語を使える」人達のノンフィクション物語として面白く、そういう人材育成のための参考資料になるかもしれない。

- (2) 英語文化の常識教養の習得をめざす。英米の教養人と共通の認識を持ち、誤解なく意志疎通できるように、英語文化や社会事情を理解するとともに、さらにより高い教養を涵養する⁵⁾。
- (3) 異文化理解に努める。英語圏以外の異文化も理解し、受容して、コミュニケーションの際に誤解や支障をきたさないようにする⁶⁾。
- (4) 日本文化を紹介する力を養う。英語文化を受容するだけでなく、日本人として日本文化を理解し、外に発信できる力をつける⁷⁾。
- (5) 体系的な科目配置と系統だった教材使用。20単位の科目を体系的に配置し、担当者に恣意的に内容や教材の選択をまかせるのではなく、一定の内容と難易度を考慮した、いわば準統一教材から選択するようにする。
- (6) 少人数のゼミ的形式とアドバイザー制の導入。授業はインテンシブコース希望の約40名を2クラスに分け、少人数のゼミ的形式で行う。また個別指導ができるように1、2年生でアドバイザー制をとり、教室の内外でも指導する。担当者同士でも連絡を取り合い、緊密な指導体制を築いて、学生個人に、全人的な配慮をした指導ができるようにする。

2.3 目標

数値目標としては、一般的に社会で要請されている程度のレベル、TOEIC で言えば600点 [650点] (TOEFL で500点、英検では準1級) く

⁵⁾ このことは必ずしも、アメリカ英語やイギリス英語の優越性を言っているのではない。國弘正雄のいう、「脱英米的な英語」あるいは「英人にも米人にも、欧州人にもアジア人にも通用する英語」(『英語の話し方』サイマル出版会、1984: 262-64) や、また鈴木孝夫が30年来唱えてきた「イングリック (Englic)」(『閉ざされた言語・日本語の世界』(新潮選書、1975; 『英語はいらない! ?』PHP 新書、2001) のような考え方も視野に入れる必要があるのではなからうか。

⁶⁾ 異文化コミュニケーション論に関しては、Edward Hall の *The Silent Language* (1959) あたりを嚆矢とし、最近のコミュニケーションブームの中で百花繚乱の趣である。その中で「要するに英語とは、英米人の真似をするための手段ではない。アジアや、さらには非英米圏の人々ともコミュニケーションを行うための道具であるという認識が必要だと思うのである」というような、上述の國弘や鈴木とも重なるような見解もあり意義深い(和田秀樹『英語脳』のつくりかた』中公新書ラクレ、2003: 164)。

⁷⁾ 例えば、鈴木『日本人はなぜ英語ができないか』のVIII章「英語で日本文化発信を」を参照。

らいとする⁸⁾。外国語の習得には膨大な時間がかかり、TOEIC を例に取れば、得点を100点上昇させるには200～300時間の研修時間が必要と言われている⁹⁾。20単位履修すれば、約500時間の授業時間となるので約200点の得点アップが見込まれる¹⁰⁾。

これにさらに AV 自習室の AV 教材やパソコン教材を利用して自己研修を積み、課外活動、できれば海外研修などにも積極的に参加すれば、本学の上位の学生（入学時に TOEIC で400～450点くらいのレベルの学生）は目標の水準に到達することが期待できると思われる。

また、単に技術としての英語習得というだけでなく、英語学習を通じて、自己を啓発修養し、人間的にも成長することが大事であるから、英語に偏した個性ではなく、教養があり人間性豊かで品格ある学生の教育をめざすことも大事である¹¹⁾。

2.4 科目とスキル

2.2で述べた教育方針を実現するために、次の科目を設置した。「文化背景①②」、「英米事情①②③」、「日本事情①②」、「異文化コミュニケーション①②」、「ドラマ①②」、「現代小説①②」、「時事英語①②」、「英会話①～④」、「表現法①②」。

使える英語の習得ということであるから、当然、内容的にはアカデミックなものではなく、あくまで、語学の技能や技術の習得を前提に、常識や教養的な内容に、若干学問的知識を加味したレベルや内容を意図している。

⁸⁾ 大西駿二『国際化時代の英語教育』（近代文芸社、2001: 105）によると、「TOEICでも、レベルの高い一般大学卒で企業に入社した理系出身者の平均点は322点、文系は441点である。[中略] 東大の場合、岡秀夫東大教授の論文から推測すると多分平均点は600点以上あると思われる」とあり、本学の目標 TOEIC 650点は、相当高い目標値であることがわかる。

⁹⁾ 鹿野晴夫，“Scoring well - The TOEIC Test - TOEIC テストの活用(3)TOEIC テスト導入の目的”，*The Daily Yomiuri*（2002年6月）参照。

¹⁰⁾ 大西（2001: 106）で、「こういうレベルの学生でも1年間語彙増強に励み、読解力、リスニング、会話力向上に努力すれば、TOEIC で50～150点ぐらいは向上する。努力を怠ると1年間で100点ぐらいは低下する」とある。

¹¹⁾ 例えば、藤原正彦『国家の品格』（新潮社、2005）のような考え方もある。

「文化背景」は、英語圏の人たちには当たり前すぎて等閑視しかねないような常識や教養、例えば、マザーグース、オノマトペ、数字の読み方、釣り銭の返し方などの卑近な日常例について学習する。「英米事情」は、英米の生活文化、社会習慣などの文化や社会事情について学習する。1年次はアメリカ事情、2年次イギリス事情、3年次は英米比較である¹²⁾。

「日本事情」は、日本の伝統文化や生活文化、社会事情の学習を通じ、外国人が日本について知りたいと思うような知識を英語で伝える力を養う。「異文化コミュニケーション」は、異文化間の文化の違いによって、意思疎通に支障を来すことがあるが、そういう齟齬を解消するにはどうしたらよいかという、コミュニケーションの方策を学習する。

「ドラマ」は、劇や映画の脚本を教材として、映像を楽しみながら、日常会話のみならず、高度な会話も学習する¹³⁾。「現代小説」は、純文学ではなく、英米人が日常的に読むペーパーバックの通俗小説などを読むことを意図したが、短編小説家 Dahl などの易しい小説を教材に学習してきた。「時事英語」は、新聞やマスコミのニュースなどを教材とし、時事問題について、英語で理解し、語るができるようにする。

「コミュニケーション」や「表現法」は、話す力や書く力を養成する科目である。「コミュニケーション」は、日常会話から、スピーチ、デベート、プレゼンテーションまで、初級から上級までのスピーキング能力を養成できるように企図した。「表現法」は、単文の英作から、パラグラフライティングや、さらに高度なエッセイライティングまでを包括している。

4年目からは、新たに「英語発音法」「英文法」「世界の英語」などの科目が加わった。「英語発音法」は英語らしい発音、通じる英語のための発

¹²⁾ 言語と文化・社会の関係はコインの裏表のようなものであり、文化・社会面を切り離して、言語のスキルだけの教授、そして習得などありえないと思う。初修言語であっても、スキル同様に文化、社会事情の説明がなければ、言語の理解は不可能に思える。

¹³⁾ 宇都宮大学で、TOEICを究極の目標とはしない英語教育改革が数年前あり、週3回の授業のうち一回は、ドラマを教材に使うというカリキュラムであるという報告があった。この科目設置の正当性が立証されたように感じた。因みに、宇都宮大学の英語教育は、2013年、大学英語教育学会（JACET）の学会賞（実践賞）が授与されている。

音演習と発音理論の学習。「英文法」は使える英語、通じる英語のための文法演習である。「世界の英語」は、同じ英語圏でも英米豪加では若干異なる英語が、旧英領の国でも変種の英語が話されている。各国の英語の特徴を学習し、円滑に意思疎通ができるように意図した科目である。

運用能力を高め、積極的にコミュニケーションをとり、自己を表現する発信型の授業が求められているのであるが、しかし、発信型ということは、即、会話の比重が高くなるということではない。高度な会話力を養成するには、読解、語彙、文法、作文の力もまた必要であり¹⁴⁾、内容の空疎な会話では、とうてい相手の信頼や尊敬を得ることはできない¹⁵⁾。そのため、技術としての英語力の向上はもちろん、英語の根ざす文化や社会事情の理解につながるような、また他文化の人たちと円滑に意志疎通できるような、さらに日本人として日本のことを外に向けて発信できるような、内容中心の科目を設定している。そのうえで、科目の内容に合わせ、スキル向上のための授業形態を個別にあるいは集合的に考える必要がある¹⁶⁾。

2.5 選抜とクラス編成

毎年、オリエンテーションには、70～100名くらいの希望者が集まって

¹⁴⁾「日常会話を話せればよい、というだけの発想では、語彙がなかなか増えない。すると自分の考えを的確に論理的な文章にする表現力が身につかない。語学は、あくまで「読む」「書く」「聞く」「話す」の四つの要素をバランスよく習得していくことが必要であろう」という明石の見解は正論に思われる(明石康『サムライと英語』角川書店, 2004: 174-5)。鈴木も「会話ができるようになるためには、読書も大切なのです。本は読みたくないが、英語で会話をしたいというのはまったく無理な注文です」と言う(『日本人はなぜ英語ができないか』1999: 115-117)。

¹⁵⁾いわゆる「英語べらべら族」に対する桐島洋子の辛辣なコメントは、ある程度の真実をついているであろう(『日本人の国際性』『英語を習うということ』國弘正雄編著, ELEC 選書, 1980: 118)。「拙い英語でも、内容ある会話ができる人は尊敬される」という考え方もある(和田秀樹『「英語脳」のつくり方』(2003: 137-8)。「べらべら」程度の英語力だけでは、とても文化的・学術的な意志の伝達はできない」というようなさらに一層高度なレベルからの見解もある(斎藤兆史『英語達人塾』中公新書, 2003, 9)。

¹⁶⁾語学において、スキル養成は当然の話であるから、スキル以上の付加価値を科目に持たせる必要があると思うが、2013年の新カリキュラムで、スキルを科目名にしているのは、第二外国語の初級レベルならともかく、ある意味、退行した発想の気がする。高校の英語科目と同じ名称では、学生の興味も喚起しがたいのではなかろうか。

くれた。学生の中には、すごく難しいことを学習するコースであるという思い込みを持つ者もあり、英語が優秀な学生でも参加に尻込みする節があるので、誤解を解くよう繰り返し説明してきた。また、英語が得意な学生でも、英語を使える人材の育成という目的のコース自体に、必ずしも関心があるというわけでもなく、集まった学生がすべて本学でトップクラスに位置する学生ということではない。

簡単なプレイズメントテストを行い、志望の動機を書いてもらい、それをもとにして、40数名を選抜してきた。2009年と2010年には、TOEIC Bridgeをプレイズメントテストに使ったが、それ以外の年は自前のテストで選抜した。TOEIC Bridgeを2年でやめたのは、成績の連絡がクラス分け発表の前日にしか届かないため、選抜作業に十分時間をかけることができなかつたためである。但し、TOEICより易しいこの試験を受けることにより、その後のTOEIC受験の橋渡しになった利点はあったようである。

インテンシブに所属するかどうかで、極端な言い方をすれば、人生が変わるかもしれない経験ができるということもあり得るので、一人でも多くの学生を入れたいと願い、50名近くの在籍者がいた年もある。均等に2クラスに分かれるとは限らないので、一つのクラスが30名ほどにもなり、少人数とは言えないクラス編製の年もあったのは反省すべき点であった。

2.6 課外活動

2.6.1 アドバイザー制

4～5名の専任教員がおのおの10名前後の学生のアドバイザーとして、学習や学生生活に関する助言をすることができるようアドバイザー制を敷いた。研究室での懇談のみならず、懇親会や食事会を開いたり、フィールドワークの助手を務めてもらうこともあった。

2.6.2 英会話サークル

昼休みを利用した英会話サークル（Global English Lunchroom）を長期

休暇と試験期間を除く毎日実施した。ゼミ室を利用したこのサークルには数名から十数名の学生が集まって英語のみの会話活動を実践してきた。英語教員が交替で助言者として参加し、補助指導を行った。教室の中だけでは得難い貴重な経験になったのは確かであるが、参加学生が固定化されるきらいがあったのは否めない。

2.6.3 海外研修

2005年、英国シェフィールド大学での2週間の研修とロンドンの市内見学を実施した。インテンシブコースの学生2名と一般学生3名の参加があった。2007年以降は、カナダのマラスピナ大学（現バンクーバーアイランド大学）で、2週間（2013年より3週間）の研修が行われ、毎年、英語インテンシブの学生数名を含む10名前後の学生が参加してきた。

2.6.4 フィールドワーク

本学の教員の引率のもと、英語インテンシブの学生を含む数名の学生が、市内のアメリカンスクール校で、算数、そろばん、日本語教育指導補助を、英語を使って行ってきた。また、市内の公立小学校の英語活動にも参加し、発音指導などを通じての教育活動による地域貢献を行った。

2.6.5 TOEIC 講座

毎年、春と秋に約8週間、TOEIC 講座を開設し、教員が分担して、週1回の講座を受け持ってきた。一般学生も含む50名ほどの受講生でスタートし、TOEIC の実技指導を行なった。ただ、授業の提示の仕方を工夫しても、TOEIC 学習の興味を維持継続するのは難しく、徐々に欠席者が増えていくのは、残念ながら、毎年の傾向であった。

2006年春に、「春期特別講座」と銘打った3週間の講座を開催した。5人の教員が分担して毎日2コマの授業を実施したが、出席者がきわめて少なかったのは残念であり、翌年以降の開催は見送らざるを得なかった。

3. 成果検証：TOEIC の全成績について

この節では、インテンシブに在籍した全学生の TOEIC のすべての成績を提示し、それについて説明記述し、感想や私見を述べていきたい。全員の全成績を示す理由は、一人ひとりの学生がいかに関心、奮闘したかということ、また、ただ漫然と在籍した者も少なからずいたということ、仔細に見ていくための唯一の方法と考えるからである。単に、600点以上の合計人数をあげたり、平均値を提示したり、個人の最高点を示すだけでは、一人ひとりの学習歴や、成績の裏に潜む喜びやつらさという、一人の人間としての心の移ろいは到底理解できないと思う。

成績向上も右肩上がりというわけではなく、上昇下降を繰り返しながらの向上で、いかにも人間味を感じさせる。もう少しで大台に乗れるのに、というもどかしさも見てとれる。長期の低空飛行にはいらだちを覚えるほどである。点数の推移には、学生ひとり一人の息づかいさえ感じられるといっても過言ではないかもしれない。学年全体の成績状況や、印象深い学生のエピソードも交え、適宜詳細な説明を加えていきたい。

表の読み方は、縦軸は、学科ごとに点数の高い順に並べている。横軸は時間軸で、年と受験月を示している。「センター」はセンター試験点数(筆記とリスニング。一部はすでに200点に換算された所与のもの)、「Bridge」はプレースメントテストに使った TOEIC Bridge の点数である。各年度の最後に、その年の最高点をあげ、4年次の最後に、通算での最高点をあげた。受験者が若干名しかいない受験月は、表制作の便宜上、前後の月と一緒に提示している。

点数の推移がわかりやすいように、500点以上については、100点刻みで色付けした。うす緑は500点台、うぐいす色は600点台、青は700点台、うす紫は800点台である。途中でコースを辞めた者は、「離脱」と記した。

3.1 2005年 (一期生)

期待と不安の入り混じったオリエンテーションの日、果たしてどれだけの学生が応募してくるのか危惧されたが、約70名の学生が集まってくれた。このコースの説明のあと、簡単なプレイスメントテストを行い、46名を選抜した。五里霧中というような思いで、試行錯誤しながら授業や課外活動に取り組んでいくことになる。

TOEICは、1年次、7月と12月の2回実施した。受験者も少なく、延べ17名で、600点はおろか、500点台が3名しかいない。まさに暗雲が垂れ込めているという情景であったと思う。TOEIC受験者は学年が上がると徐々に増えてくる。2年次に600点達成者が2名出たことは、砂漠の中のオアシスとでもいうような安堵感があった。この2名は、点数だけでなく、会話力もかなりの学生であったが、残念ながら、700点には到達していない。「TOEICを受けるのが怖い」という成績上位(590点)でしかも勤勉な学生がいたのは、TOEIC学習の難しさを語っている気がしたものである。

2年生の10月に555点をあげた学生がいた。目立たず、話す方が苦手な学生ただだけに、教員の一人が、「うれしかあ」と思わず口をついて出た言葉がいまだに耳に残っている。そういう小さな喜びの積み重ねが、ここまで我々を引っ張ってくれたのであろうと思う。

3年になって、最優秀の学生が初めて受験し、795点という、昔なら夢のまた夢でしかなかった高得点をあげた。まさに嬉しい驚き以外のなにもでもなく、大きな励みになったことは言うまでもない。一方、4年間一度も受験しなかった剛の者もいた。成績下位者で、先延ばししているうちに、気がつけば、受験しないまま4年が経過したということであろう。翌年から、年2回のTOEIC受験を義務づけることになった。

残念なのは、2年生以降の離脱者の増加である。半年、一年もすると、思っていたのとは違っていか、他にやりたいことができたというような理由である。TOEICよりも資格試験の方が大事というような指導があったとも聞く。特に、流通経営学科では¹⁷⁾、最後まで残ったのは22名中3名のみであったのが残念である。

¹⁷⁾ 以下、流通経営学科は「流通」を、経済学科は「経済」、地域政策学科は「地域」を便宜上使用。

表1 2005年

2005年	2005			2006				2007					2008										
	5	12		5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	1	最高点	4	5	7	10	12	1, 3	09.7	最高点	
経済																							
A		475								530		605		605		575			590			765	765
B		330						525				550	620	620	530	550	580	665	620	640			640
C		475		450				450		530			605	605		575			590				605
D										565		560	515	565									565
E							410	410	440	475	550	525	490	550									550
F				360		380				385	485	460		485									485
G							415	415					460	480	480								480
H		250	250					250				400		400									400
I							300	300															300
J	250																						250
K																							—
L							455	455															離脱
M	455																						離脱
N	415																						離脱
O																							離脱
P																							離脱
地域	5	12		5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	1	最高点	4	5	7	10	12	1		最高点	
A												795		795									795
B	475		630					630		620				620						615			630
C	500			520				520	520		515	575	590	590									590
D		305					340	340		515	535	520	535	535									535
E							415	415		405	445		470	470									470
F			430					430				390		390									430
G		335					255	255			375	415		415									415
H	395																						395
I										370				370									370
J	390						310																離脱
K																							離脱
流通	5	12		5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	1	最高点	4	5	7	10	12	1		最高点	
A	535	460	625					625				580		580									625
B		385	430			445		445				535		535									535
C							440	440															440
D		380							385					385									385
E							285	285															285
F	545					570		570															離脱
G						555		555															離脱
H						375		375															離脱
I			340					340															離脱
J			405																				離脱
K																							離脱
L																							離脱
M																							離脱
N																							離脱
O																							離脱
P																							離脱
Q																							離脱
R																							離脱
S																							離脱
T																							離脱
U																							離脱
V																							離脱

3.2 2006年 (二期生)

暗中模索の一年目とちがい、気持ちにやや余裕の出してきた二年目を迎えた。プレイスメントテストで、50点満点の学生の答案内容があまりに高校生離れていたの、食い入るように一字一句に見入っていた私を、他の教員は訝っていたようだが、一ヶ月後、この学生はただ者ではないことがわかった。いきなり、TOEIC 790点をたたき出したのである。インテンシブ創設以前は、夢のまた夢というような数字が、昨年に続いて現実となった。学年全体としては、1年初期には、その優秀学生を除き、500点台は1名しかいなかったが、年度の終わりには5名に増えている。

2年次には、優秀学生は800点台に、さらに1名700点が出た。600点も2名、500点も9名に増えた。700点台に達した学生の談では、ノイローゼ気味になるほど頑張ったとのことであり、語学の習得は生易しいものではないことがわかる。漫然と在籍するだけでは進歩がないのは当然であろう。

600点以上の高得点に達するには、初点は400点以上が必要のように見えるが、300点台でも、2年、3年と継続して努力するうちに、600点に達する者もいる。継続努力が大事というよい手本である。そういう学生の一人に、英語学習の秘訣を3ページ程にまとめてもらい、皆の参考にしようと回覧したこともあった。ただ、それが有効であったかどうかは疑わしい。各自が、自分なりの学習方略を見つけ出し、それなりに精進しなければ、成績向上は難しい。自助努力がないと他力本願ではだめなのである。

3、4年次には、さらに700点が2名、600点が2名と高得点者が増えてきた。通算で、800点1名、700点3名、600点3名、500点7名となった。その反面、離脱者も多く、全体で17名、3分の1以上が辞めている。伸び悩みや、他にやりたいことができたとか、資格試験が大事というような理由である。

3年次、100点以上点数を下げた学生が、「怒られる」と、ふとつぶやいたのを耳にした。インテンシブ在籍者としての責任意識は2009年頃までの多くの学生にはあったと思うが、インテンシブ後期になると、そういう義務感とは無縁の雰囲気も出て来たように感じた。

表2 2006年

2006年	2006					2007					2008					2009								
経済	5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	12, 1	最高点	5	7	11	1	2	最高点	
A		405	415		415		495	590	490		590	605	660	605	610	660					685	690		690
B		335			335	470			500	570	570	565			540	565						565	665	665
C							435			440	440	525	495	545		545	535	550						550
D		415			415		520	465	490	520			475			475								520
E				305	305		435			440	440													440
F				325	325			535			535													離脱
G				385	385	465					465													離脱
H				290	290		365		330	445	445													離脱
I				365	365	345					345													離脱
J				365	365																			離脱
K				440	440																			離脱
L				390	390																			離脱
地域	5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	1	最高点	4	7	11	12, 1	最高点	5	7	11	1	2	最高点		
A	790				790	765			840		840		840			840							895	895
B	475		570		570	610		720		720	610		610		610									720
C		485		495	495	520		520		520	415	535	530	575	575									575
D	485	495	515		515	435	490	560	530		560	405	515		510	515			565					565
E	435				435	435			440	525	525		465			465								525
F		430			430		410		450		450	425	465	445	475	475								475
G	450					450																		450
H		250	370		370	385		400	350	440	440		310		395	395								440
I		390		420	420		405		400		405		405		400	405								420
J		375			375		375		410		410		395		415	415								415
K		370			370		335				335													370
L	380		495		495		450		480		480													離脱
M		360			360		455		465		465													離脱
N							455				455													離脱
O		400			400	425					425													離脱
P	415				415																			離脱
流通	5	7	11	1	最高点	4	5	7	11	1	最高点	4	7	11	12	最高点	5	7	11	1	2	最高点		
A		560			560		390				390	685			730	730								730
B	475		525		525		545		490	560	560		565	605		605					560	605	605	
C				455	455										530	530								530
D		405		410	410		475		525	485	525		510		510									525
E			455		455		310				310	450			430	450								455
F						420	415			455	455													455
G			350		350		355				355				440	440								440
H										430	430			415	405	415				390				430
I							370		370		370													370
J							400		450		450													離脱
K				505	505																			離脱
L				450	450		405				405													離脱
M				295	295		330				330													離脱
N				355	355																			離脱

3.3 2007年 (三期生)

1年次初期には、500点が8名と、前年よりも良い成績であった。後期には、625点が出たが、この学生はその後、低迷した成績が続き、在籍していたかどうかさえ怪しくなる。500点は12名に増えてはいるが、4名の増加というのは寂しい数字である。2年次になると、600点がさらに増え6名になる。そのうち2名が700点に達した。500点台はほとんど増加しておらず、伸びた者とそうでない者の二極化現象が起きているようである。

成績上位者は益々張り切って頑張るが、下位者、特に300点台の者は、日々の授業で自己のランク付けをして、周回遅れとでもいうような気持ちになるのか、徐々に学習に対する意欲も薄れていくようである。よほど、克己心があり精神力が強くないと、成績上位者に伍してやっていくのは難しくなるようだ。もちろん中には、最初300点台であっても、頑張って600点に到達した者もいるが、例外的な存在と言えるかもしれない。(但し、初めての慣れない試験で、本来の実力が出せなかったということもあり得る。1ヶ月後の2回目の受験で大幅アップする学生が少なからずいるからである。)

3、4年次になると、600点が2名、700点もさらに2名現れた。地域で、3年次に600点が2名出ているが、コンスタントに学習努力を継続した結果であろう。そのうち1名は、1年間語学留学し、現地で890点という素晴らしい成績を残したと聞く。継続は力を身を以て示した学生と言える。

累計で、700点4名、600点5名、500点7名である。学科別には、経済が圧倒的に良い成績を残している一方で、流通は見る影もない。最初10名いた学生が3名しか残らず、1年次の最高点の学生は、途中で消息不明になり、卒業したかどうか危ぶまれる。残った3人の学生が最後までがんばってくれたのがせめてもの救いと言えようか。

離脱者は、合計29名、最後まで残ったのは、途中参加者も含め、21名でしかない。学生の離脱は自由に認めたわけだが、我慢して続けることの大切さを教えることができなかったことになる。この3年間の離脱者の多さから、途中離脱を防ぐための制度改善が翌年度から行われた。

表3 2007年

2007年	2007						2008						2009						2010			
経済	4	5	7	11	12	最高点	4	5	7	10	12	1	最高点	5	7	11	12	1, 2	最高点	前後期	最高点	
A	520				560	560	565	655		770			770		730					730		770
B	370				530	545	545	565	615				615	650	670	730				730	685	730
C				350		350		475		645	640	715	715									715
D		545			545	545	575				620		620			715				715		715
E		300				300		430		480	600		600									600
F		475	545	570	505	570		595			560		595			570				570		595
G		530				530		470	550		410	510	550			500				500		550
H		340		380	505	505		375			440		440			500				500	545	545
I		345		345		345		410			415		415		445				385	445		445
J	385					365		385				400	400									400
K		510		525		525	500	620			535		620									離脱
L		380				445		350		465												離脱
M	385					385		460														離脱
N		325		420		420																離脱
O		405				405		305				475	475									離脱
P	380		455	345	440	455		385			395		395									離脱
Q		390				390																離脱
R		305				305																305
地域	4	5	7	11	12	最高点	4	5		11	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	前後期	最高点	
A		555				570	570	575				515	575	515		605			665	665	630	665
B		355				500	500	590				545	580	580	620	620	620	610	620			620
C		540		525		540		575		500	570	575	575	590		580			535	590		590
D								410	410				410	565			425			565	500	565
E				390		390	410			495		460	495	410	525	530	515			530		530
F		350				350		390			420	430	430	500		430				500		500
G				420		420	420	495		485	485		495		450	495				495		495
H		420			355	420	420	490			440	490	440				410	390	410			490
I					385	385	380				390	390	400				460	440	460			460
J		325		320		325					335		335		365	455				455		455
K	295					295	385					290	385									385
L		555				470	555	485			430		485									離脱
M	435					495	495	485	380				485									離脱
N	455					455				410			410									離脱
O			440			440		385					385									離脱
P		330			410	410																離脱
Q		405			345	405	375						375									離脱
R		355		285		355	390				405		405									離脱
S		405		465		465																離脱
T		420				420																離脱
U		380				380																離脱
V		360				360																離脱
W					325	325																離脱
流通	4	5	7	11	12	最高点	4	5		11	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	前後期	最高点	
A		590				625	625	630					630									630
B		400		440		440		455					455	420	420							455
C		315		360		360		400			395	400	400		450		320			450		450
D		425				425		455		425	465		465									465
E		400		390		400		440			440		440									離脱
F		425		415		425		435					435									離脱
G		365		400		400		355			430		430									離脱
H		350		335		350		365					365									離脱
I		340				340																離脱
J		305				305																離脱

3.4 2008年 (四期生)

1年初期には、500点4名と650点が1名という成績である。650点の学生には、大きな期待がかけられたが、昨年度の625点の学生と同じように、その後は、鳴かず飛ばずの低空飛行が4年間続いた。まぐれで650点が取れるはずもなく、同じ学科で2年続けての最高得点者のその後の歩みは、未だに理解に苦しむ。

1年後期に、新たに695点が出て、500点も12名になった。695点の学生も、この学生の最高点で、その後、足踏みが続く。TOEICは向上どころか、維持するのも難しい試験であるということかもしれない。2年次、600点がさらに2名と、500点が通算20名になったのはうれしいことであるが、過年度に、700点や800点さえ出たことを考えると、まだまだ実力発揮とは言えないようである。

さすがに、3年次になるとそれまで蓄えた力が顕現してきたのか、さらに700点1名、600点は5名増え、通算9名になった。400点台後半の学生が、語学留学ののち、700点を突破したのも嬉しいことであった。1年や2年ですぐに成果が期待できるはずもなく、まさに石の上にも三年というのが語学習得の鍵なのかもしれない。逆に、500点台後半の成績を続けながら、結局600点に達しない学生が10名近くいた。努力不足もあるのであろうが、600点達成を遮る、何か高い壁でもあるかのようである。

300点台で始まった者は伸び悩むと上述したが、この学年でも、1年初期に300点台だった者は、500点に達することはなかった。TOEIC対策はある程度の基礎力がないと、闇雲にTOEIC指導をしても消化不良になるだけで、あまり学習効果は期待できないということになりそうで、それは現在の新カリキュラムにも通じることである。

最終成績は、700点2名、600点9名、500点16名である。内訳は、経済学科700点1名、600点4名、500点6名、地域600点3名、500点3名、流通600点2名、500点7名で、経済が優勢ではあるが、3学科ともある程度の成果を出したと言えよう。なお、この年から、AO入試が始まったが、600点達成者は3名出ており、まずまずの成績と言えそうである。

表 4 2008年

2008年	2008							2009							2010							2011	
	4	5	7	11	12	1	3	最高点	4	7	11	12	1	最高点	5	7	10	12	1	最高点	前後期	最高点	
経済	A	425		440		455		455	420				490								705	705	
	B	390			415		475	475	490				490	490		540	700	690			700	700	
	C	500	575	565	695			695	630		585		590	630		635	545		425	635	545	695	
	D	445			510	580		580	580	540		645		645	635	680	690				690	690	
	E	425			460	555		555		495	560	585		585	615		570			615	615	550	615
	F	505		525		555		555	495		540		590	590	510	610		555			610	610	
	G	455		450		465		465	480			500		500	580	540			515	580	580	580	
	H	385		550		455		555	570	470	480			570	515			415	480		515	570	
	I	390		475				475	515		570			570				550			550	570	
	J	375			465			465	565				555	565								565	
	K	435			440		510	510	540					540								540	
	L	400		535		525		535	500				490	500			490				490	535	
	M	410		415				415	400		400			400		505					505	505	
	N	445				385	490	490		410				410		365					365	490	
	O	330		380				380	385					385	320		460				460	460	
	P	385			360			385	435				380	435								435	
	Q	410					385	410	380					380								410	
	R	250				375		375	350					345	350							離脱	
	S	410				510		510		545		565		565		525		570				離脱	
	T	380				480		480			315		315	315		410						離脱	
地域		4	7	11	12	1	3	最高点	4	7	11	12	1	最高点	5	7	10	12	1	最高点	前後期	最高点	
	A	525		525		480		525	525				495	525	625		560			690	690	690	
	B	420			555			555	500	525	555			555	610	585	680				680	680	
	C	505			570			570	495			545	370	545			525				525	570	
	D								430	470		440		470	490			560			560	560	
	E	425		430		555		555		435	555			555		410	470				470	555	
	F	345			395	485		485	395	420		405		420		365	435	480			480	480	
	G	325		370		350	370	370	335		370			370	475						475	410	475
	H	340		450				450	400					400	270						270	450	
	I	430	415	445				445		375				415	415			430			430	430	
	J	330				375		375	335					375	375		425				425	425	
	K	315	335		355			355		375		375		375								375	
	L	450	380	475		485	380	485		535	620			620								離脱	
	M			465	455			465	525					490	525							離脱	
	N									325				325								離脱	
	O	390						390														離脱	
	P	375						375														離脱	
	Q	295						295														離脱	
流通		4	7	11	12	1	3	最高点	4	7	11	12	1	最高点	5	7	10	12	1	最高点	前後期	最高点	
	A	650		545				650			295			525	525		535				535	650	
	B	360		485		475	355	485	535		530			535			615				615	615	
	C	490		565				565	545		555	555	590	590		565	585	570			585	590	
	D	400		435				435		465				465			565	585			585	585	
	E	385		375		445		445	490	535			490	535	500	570	555	565			570	570	
	F	265			370	385	465	465	415	475			525	525		550	485				550	550	
	G	360		380				380	470					485	485		470		525		525	525	
	H	320				350		350	365					455	455		440			525	525	525	
	I	365						365	420		490			490		485				505	505	505	
	J	465						465	445		470			470				455			455	470	
	K	305			415			415		335				335		375					375	415	
	L	455		395		440		455	550		385			550								離脱	
	M	250		400		400		400			315			315								離脱	
	N	475	445		470			475										465				離脱	

3.5 2009年 (五期生)

1年初期では、600点2名、500点7名の成績である。いきなり600点2名というのは、初めてのことであり、大きな期待がかけられたが、その期待に達することなく、この2名は、その後、学年の牽引的な役割を果たしてくれたと思う。1年次の終わりには、700点1名、600点2名、500点11名という成績であった。2年次になると、さらに成績が飛躍的にアップし、700点3名、600点8名、500点9名となっている。その進歩は、表の鮮やかな色彩が示しているとおりでである。

3年次には、トップの学生は800点に達している。但し、全体的に、2年次ほどの向上が見られないのはやや息切れしたか。ある程度の目標に達した者はそれに満足するし、伸び悩みの者は、あきらめの境地になるのかもしれない。それでも、新たに600点が、3年次に2名、4年次に1名出ている。うち、2名は1年次300点台だったので、頑張ればできるというお手本となってくれた。コンスタントに成績を向上させた学生が多いのも、この学年の特徴である。

英語インテンシブの歴史の中で、この学年が最高の成績をあげている。累計で800点1名、700点5名、600点9名という好成绩である。入学時の成績が、他の年度と比べてもそれほど良かったというわけではなく、何がこの学年をそれほど奮起せしめたのか、気になるところである。

学生に聞くと、成績上位者同士があいつには負けたくないという思いから、競いあったそうである。一人で地道にこつこつやるのはもちろん大事であるが、友達同士、励まし合ったり、切磋琢磨することも大切である。この学年はそういう、学生間の交流とか競争がうまく成績向上につながったのではなかろうか。成績がよいからといってひけらかしたり、得意になるのではなく、気さくな性格で周りとは打ち解け、支え合ったり競い合う雰囲気を作り出してくれる優秀な学生がいたことが大きかったという気がする。そういう雰囲気のためか、離脱者がひとりも出なかったのもこの学年だけである。

授業の一環で、会話の暗唱を学生に課していたが、この学年の上手さは特筆に値するものがあった。発音も会話の流れも非の打ち所のない学生が多くいたのである。それがTOEICの得点に直結していたようでもある。

表5 2009年

2009年		2009						2010						2011						2012				
経済	Bridge	5	7	11	12	1	最高点	5	7	10	11	1	最高点	5	7	11	12	1, 3	最高点	5, 6	7	最高点		
A	168	695		780			780		755		725		755		770		815		815				815	
B		525		585		555	585	670	795		715		795		725			750	750				795	
C	142	460	475	505			505	575		610			610			635	660	690	690	755			755	
D	146	375			510		510		435		550		550		550	565						670	670	
E	140		560			540	560		585		565		585		545	610			610		645		645	
F		400		440			440	400		545			545		465		440		465				545	
G	128	340				340	340		350		495		495	460	450		295		460	545			545	
H	146	480				520	520		470		540		540		505				505				540	
I	122	370				445	445		480				480								505		505	
J	136	430			450		450		495		500		500		410		365		410				500	
K	142	365	415		440		440		465	480			480		425	500			500		415		500	
L	124	400	415		420		420		450		420		450		400	500			500		405		500	
M	144	390	465		495		495		460		450		460		450								495	
N	138	375				395	395		465		415		465		410	465				465			465	
O	142	375		425			425		415		455		455		460		455		460		355		460	
P	142	250				420	420		415		455		455		400		430		430				455	
地域	Bridge	5	7	11	12	1	最高点	5	7	10	11	1	最高点	5	7	11	12	1, 3	最高点	5, 6	7	最高点		
A	168	615	625			600	625		630		680		680		620		660		660		745		745	
B	146	490	570	620	645		645		575	605			605		580			605	605				645	
C	136	460	490	495			495		520		600		600	610			560		610				625	625
D	146	365	365		350		365		410		365		410	490		510		510	510		600		600	
E	150	440	400			385		440		470	515	560	560		455		470	500	500	505			560	
F	144	415	480	485			485		495		515		515			520		520	545				545	
G	134	365		405			405			475			475	345		500			500		245		500	
H	144	405	460		415		460		400			420	420		480		405		480				480	
I	140	340	330		400		400		360			455	455		380		395		395				455	
流通	Bridge	5	7	11	12	1	最高点	5	7	10	11	1	最高点	5	7	11	12	1, 3	最高点	5, 6	7	最高点		
A	148	470			525		525	770				600	770		610				610				770	
B	146	280	540		495		540		635		480		635		630	620			680	680	750	705	750	
C	158	405	540	515		470	540	595		515	645		645	600	615	675			675	680			680	
D	144	375	485	420	450		485		515		525		525		500		520		520		620		620	
E		495		555		590	590	540	605	570			605		545				545				605	
F		595	565	520			595		600		585		600		535				535				600	
G		490	550			475	550		580	540			580	560		540			560		530		580	
H	138	365	460	425		455	460	470	395	510			510	580		480			580				580	
I	142	430	365			445	430	445	510	410		540	425	540	575	450	465	505	475	575			575	
J	154	495				485	495		565			555	565		525				525				565	
K	136	375	460		420	410	460	470	495		470		495	475		475			475	545			545	
L	140	410	425		370		425		445		435		445		440	545			545		390		545	
M	126	345	475			335	475	425				445	445										475	
N		375	285		385		385		450	470			470										470	
O	142	455	395				455		385			465	465				440		440		460		465	
P	122	340	340	405		290	405		355			290	355		360				360				405	
Q	134	300	330			310	330		215	330			330		335			290	335		245		335	

3.6 2010年 (六期生)

1年初期には、600点2名、500点も10名いて、その後の大きな向上が期待されたが、思う程の伸びがなかったのは、最初がよかったですだけに不可解でさえある。

1年次の終わりには、700点1名、600点3名が出ている。500点も18名出ているから、幸先よいスタートだったと言える。2年次には、600点が2名増え、5名となった。500点も24名いる。さらに大きな飛躍が望めたと思うが、3年になると700点が1名、600点が2名、新たに出ているものの、全体的には伸び悩んでいる印象が強い。

最初から最後まで、500点台のままの学生が6、7名いたというのも、その感を強くしている。初回545点取りながら、4年間500点台後半のままというのが不思議な程である。もう少しで大台に乗るのに、なぜもうひと頑張りができないのかと、まさに笛吹けど踊らずというもどかしさを覚えたものである。

最終的には、700点2名、600点7名が出ている。3年になって、700点に達した学生は、カナダの語学研修に参加し、その後1年間の留学もするなど、大いにやる気をみせてくれた。当然ながら、明らかに会話がうまくなっていることや、TOEICの高得点にもつながっている。600点台に達した者もやはり意欲をみせているのは同じで、結局、学習動機を高めることが一番の近道ということになると思うが、おいそれと動機を高める術がないのが難しいところである。

500点台の後半に達しながら伸び悩んだ者は、かけられた期待が上滑りしながら成果が上がらず、4年まで行ってしまったという印象である。600点に達するのを遮る壁でもあるのか、越えられない障壁が仁王像のように立ちはだかっているのか、という感がするのは筆者だけか。前年度の学生に見られた、湧き上がるような熱意というものがそれほど感じられず、冷めた雰囲気や漂っていたようでもあった。やればできないはずはないのに、がんばろうとしない。ひたむきに打ち込む、そういう精神が全体としては欠如している。それは、この後の2学年にも共通した、ゆとり世代の気質のような気がしてくるのである。

表6 2010年

2010年		2010						2011						2012						2013			
経済	Bridge	5	7	10	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	5	6	7	11	12	1	最高点	7	11	最高点
A	140	445			540		540		525		610		610	575		770				770			770
B	—	500		550			550	625			620		625	655	655	690	655			690	655		690
C	—	545				510	545	590			560		590	520			520			520			590
D	136	465		470			470		440		375		440	575						575			575
E	150		420			495	495		445		560		560		455					455			560
F	152	480			520		520	470				555	555	535				535		535		495	555
G	142	400		400			400		370	545			545		455					455			545
H	156	520			505		520	530			520		530	530			540			540			540
I	140	340		435			435		420		540		540	455			465			465			540
J	146	495		385			495	440			490		490		530			460		530			530
K	138	355			425		425		445		520		520	510						510			520
L	134	415			465		465		455		510		510		425		480			480			510
M	150	360			445		445		450			510	510	465			460			460			510
N	144	500		490			500		455		460		460	415			490			490			500
O	140	345		435			435	430	425			475	475	475			465			475			475
P	—	330			395		395	425					425	440			470			470			470
Q	144	435			430		435		405				435										435
R	144	410			395		410		405			395	405										410
S	156	330			395		395		325				325										395
T	136	265			360		360						360										360
地域	Bridge	5	7	10	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	6	7	11	12	1	最高点	7	11	最高点	
A	150	550		480			550		610			595	610	640		665				665			665
B	—	515		530			630	630	545		625	585		625	490		645			645	610		645
C	158	545		545			545	580				565	580		555					535	555		590
D	140	435			505	590	590		485			550	550	590					555	590			590
E	142	415		470			560	560		445		505	505										560
F	156	425			535		535		470		485		485				500			500			535
G	132		460		520		520		460		530		530		530		390	440		530			530
H	136	510		435			510		440		500		500	490				490		490			510
I	140		435	510			510	420			445		445		490					490			510
J	142	465			445		465		450		510		510		500			505		505			510
K	148	445			475		475		475			485	485										485
L	140	335	420			445	445		370			390	390		405	480	395			480			480
M	156	425		360			425	370		425			425										425
N	148	380				370	380		360				360										380
O	—		450			340	450		345				345										離脱
P	146	410																					離脱
流通	Bridge	5	7	10	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	6	7	11	12	1	最高点	7	11	最高点	
A	148	400		455			455	505	515	520			520		640			475		640			640
B	158	475			515		515		500		575		575		600	510	625	515		625			625
C	158		615				615		550				600	600									615
D	—	440		480			480	585				515	585	570		520				570			585
E	—	505			455		505	500					500	550						550			550
F	142	445			435	515	515	465	530		540		540				470			470			540
G	140	405		435			435	410			540		540		400				410	410			540
H	152	400			390		400		450	445			450		480	455				480			480
I	144	650			705		705																離脱
J	160	490				500	500																離脱
K	166	530		665			665	離脱															離脱

3.7 2011年 (七期生)

1年初期の成績から入学時の学力低下は明らかである。5月のTOEICで、200点台か300点そこそこの者が5人もいたことには衝撃を受けた。600点はおろか、500点でも3名しかいない。果たしてこの先どうなるのか、先行きが危ぶまれる状況にさえ思えた。1年終了時に、600点1名と500点台13名が出てやや安堵はしたものの、ここ数年の成績と比べても低調な結果である。

2年次になると、600点3名、500点19名と、向上は見え始めたが、低空飛行を続ける学生や、一年次から平行線の者も少なくない。3年次には、それでも、700点が1名、600点も新たに4名出て、合計6名となり、2年、3年と続ければ、それなりの成果が出てくるということは実感できる。775点の学生は、3年間、勤勉な継続努力を怠らず、右肩上がりの向上を示した希有な例である。ずっと300点台であったのに、3年秋になって急に伸びた学生もいる。何かをきっかけに心機一転、努力し頑張れば、目標に到達できるという好例である。1、2年次の甘えた姿勢からは信じられないほど、一念発起、精進し、長期留学も経験し、760点に達した学生もいる。気持ちの持ちかたひとつで大きく変わるのには驚くほどである。ただ、こればかりは本人次第であり、水場に連れて行っても水を飲んでもらえないという、教える側の指導の限界も感じるのである。

最終成績としては、700点2名、600点6名、500点18名である。500点台後半でもう少しで600点に届くのという学生も少なくない。この学年の低調な成績の理由としては、やはり、入学時の学力がそれほど高くなかったこと、リーダー的存在がいなかったことなどがあげられるかもしれない。しゃにむに頑張るということを敬遠しがちな学生気質も、年ごとに強くなっている感がある。伸びない学生は投げやりになるという印象も受けた。二極化が進み、授業やTOEICに取り組む姿勢が両極端になってきたようにも思う。インテンシブの学生だけでなく、ゆとり教育を受けた世代に共通する学生気質なのかもしれない。

表7 2011年

2011年	2011						2012						2013						2014			
経済	5	7	11	12	1, 3	最高点	5	6	7	11	12	1	最高点	5	7, 8	11	12	1	最高点	前後期	最高点	
A	425			515		515			405		425		425	565	635					635		635
B	485			565		565	580		575		545		580	620						620		620
C	355		355		345	355			410		430		430	340	435	560	610	600	610			610
D	465		485		480	485	555			450			555	520	580	585				585	580	585
E	400	400	560			560	565				480		565	570					560	580		580
F		395		435		435	570						570							570		570
G	445		490			490	535				475		535									535
H	400		440			440	445					345	445						435	435	525	525
I	475		515			515	485				460		485	485						515		515
J	470			505		505		460					460									505
K	360			425	455	455	475				460		475	500						500		500
L	460				490	460																490
M	435		445			445	470					410	470								485	485
N	445		480			480		425			445		445									480
O	415			475		475						395	395									475
P	315		360		420	420	370						370		375					375		420
地域	5	7	11	12	1, 3	最高点	5	6	7	11	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	前後期	最高点	
A	510		555			555			620		505		620		590		675			675	560	675
B	445	490		520		520	520			510			520	540		640				640	540	640
C	355		470			470	535					600	600		595	560	600			600		600
D	420	480	550	430		550	545		585				585									585
E	330	450	425	560		560	410		450	490			490	480			505		505	465	560	
F	460	430	510	445	490	510	490	525		555	495		555		530	530				530		555
G	450		485			485		530				460	530									530
H	415			520		520	455					475	475						460	460	395	520
I	450			510		510			420				420									510
J	495		475			495		510					510									510
K	305	450	475			475	505					495	505		500	480			500		505	
L	345		415			415	465		415				465		410			500	500			500
M	410	355		450		450	465		475	475			475	445		490				490		490
N	275			420		420	385		390		465		465		420					420	315	465
O	405			420		420		435				325	435									435
P	255			405		405		335				395	395									405
Q	310			245		310	215															離脱
R	485	395			440	485																離脱
流通	5	7	11	12	1, 3	最高点	5	6	7	11	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	前後期	最高点	
A	545	560	650			650	655				675		675		720	775				775		775
B		375	555							470			475								760	760
C	430			400		430		355					355									430
D		380	395	430		430			375				430									430
E		340	370			370		310				345	370		400					400		400
F	295	280		275		295		330				255	330						350	350		350

3.8 2012年 (八期生)

1年初期の成績は、200点台が2名いるように、昨年ほどではないにしても学力低下が見られる。1年前期「文化背景」の期末試験でのこと、オノマトペの問題として「ヒヒーン」を出題してみた。その正解は、「neigh」なのだが、「馬」という答えが複数あったのには唖然とした。この先どうなることかと憂慮した学年であるが、1年次、600点が出たのはうれしい驚きであった。この学生は、2年6月に700点、11月に800点に到達し、歴代でも最優秀レベルである。一方で、同じレベルに低迷する者も少なくなく、500点到達者も12名しかいない。

2年次になると、600点台が5名出ている。いずれも、最初500点台か、400点後半であり、ある程度の初得点がないと高得点は望みにくいと言えそうである。もう一人800点が出たが、同じ学年に2名というのは初めてのことであり、嬉しいことであった。良い意味でのライバル意識が働いていたのかもしれない。1~2年次に、700点とか800点が出ると、もしかしたら自分もやれるかもしれないという意識が芽生えるのか、学年全体に良い刺激を与えてくれたようである。

3年で、600点台が3名出るが、そのうち2名は最初は300点台であり、継続努力の賜物と言える。2年、3年と経つうちに、徐々に成績をあげていき、最終的には、800点2名、600点9名になっている。4年後期で650点をあげた学生は、一流商社に内定し、奮起した結果であろう。やはりものを言うのは動機なのである。1年初期の負のイメージが強かっただけに、意外にもうれしい結末に終わった感がしないでもない。

ただ、二極化もこの学年の特徴である。最初300点台や400点台の者が、まったく進歩を見せず、4年間同じレベルを低迷するというのでは、学生一人の責任ではないにしても、行く末が案じられてもくる。また、400点台後半か、500点台の初点がありながら、数十点の進歩しかなかったり、むしろ下降気味という学生にはいらいだちを覚えるほどである。それは、この学年だけでなく、この2、3年の特徴である。真面目で、勤勉な女子と

表 8 2012年

2012年	2012							2013							2014							2015	
経済	5	6	7	11	12	1	最高点	5	7, 8	11	12	1	最高点	6	7	11	12	1	最高点	後期	最高点		
A		605			605		605		735			800		800	785					835	835		835
B			595		530		595		635			690	690										690
C		395			345		395		455		465		465		515			550			550		550
D		415			445		445		530			500	530										530
E		385			425		425		520		530		530	450							450	490	530
F		380			385		385	435	420	370			435	510				515			515		515
G		440		470			470																470
H		440			420		440	455			415		455	380							380		455
I					380		380		420			430	430									430	430
J		380		400			510	510															離脱
K		430					430																離脱
L		355																					離脱
地域	5	6	7	11	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	6	7	11	12	1	最高点	後期	最高点		
A	545				580		580		635		650		650	675						675		675	
B	465				490	550	550	595	560				595		675		515			675		675	
C	535				525		535		550		625		625		555		645			645	660	660	
D	465		575		585		585		480		635		635		635		595			635		635	
E	490				490		490	510		510			510							610		610	
F	480					400	480		395		595		595		580		605			605	555	605	
G	440			470			470		530			520	530		520					520		530	
H					395		395		505		480		505		525		475			525		525	
I		370			445		445		440		485		485		500		470			500		500	
J		480			350		480		455				455				500			500		500	
K		420			385		420		450				450									450	
L		380			355		380	390			370		390	310						310		390	
M		335			320		335		360	390			390									390	
N		385			355		385			370			370									385	
O		260			335		335		325		265		335	385			265			385		385	
P		370		375		335	375		385		280		385		285	375				375		385	
Q		365				365	365		310				310									365	
R			255				350	350		210			210									350	
S				440																		離脱	
T		410																				離脱	
流通	5	6	7	11	12	1	最高点	5	7	11	12	1	最高点	6	7	11	12	1	最高点	後期	最高点		
A	505				465	590		590		630		750	750		805		810			810		810	
B	435					530	530														650	650	
C	495			505			505		530		625		625							630	630	630	
D	435				470		470	495					555	555								555	
E	545					525	545		520				540									545	
F	475				405		475	535				470	535		525					525		535	
G	390			385			390	415		490			490	485		495	495			495		495	
H	325			360			360		465	490			490		390		400			490		490	
I	375						375						375			490				490		490	
J	485				430		485		385		465		465			445				445		485	
K	420					325	420		320				320		415		350			415		420	
L						255	255						255							255		255	

言うイメージとは裏腹に、遅刻欠席が目立ったり、ひたむきに頑張るとい
うような姿勢が乏しい者もいた。ジェンダー教育の負の遺産か。死ぬ気で
頑張るといような、いわゆる根性に欠ける学生が増えている。それは、
大学だけの話ではなく、相撲界を外国力士が席卷しているのと同じ社会現
象なのではなからうか。少子化の中で大事にされ、幼稚園から車で送迎さ
れるという生活習慣の中では、養い難い精神気質なのかもしれない。そう
いう雰囲気の中で、800点2名を含む、高得点をあげてくれた学生には、
感謝の念を捧げたい。

最後に、英語インテンシブの成績を、年度別に100点きざみの達成者数
を一覧表にすると次のようになる。

表9 英語インテンシブ成績表（2005～2012）

学年	2005		2006		2007		2008				2009				計	
	初	4	初	4	初	4	初	1	2	3	4	初	1	2		3
800	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
700	0	2	1	2	0	4	0	0	0	1	2	0	1	3	2	4
600	0	4	0	3	0	5	1	2	3	7	9	2	2	8	9	9
500	3	7	1	7	8	7	4	12	12	17	17	3	11	12	15	16
400	3	11	14	6	12	8	18	23	14	12	11	17	23	17	11	10
300	2	6	6	4	22	0	20	11	9	1	1	17	5	2	1	1
200	1	2	2	2	1	0	4	1	0	0	0	2	0	0	0	0
2010																
学年	初	1	2	3	4	初	1	2	3	4	初	1	2	3	4	計
800	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	5
700	0	1	1	2	5	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	21
600	1	3	6	6	5	0	1	3	6	6	1	1	5	6	9	50
500	10	18	24	23	23	2	13	19	19	17	4	10	11	11	11	105
400	21	20	10	9	8	23	22	16	13	12	17	16	13	12	9	75
300	8	4	3	2	2	9	4	2	1	1	14	14	8	8	7	22
200	1	0	0	0	0	3	1	0	0	0	2	1	1	1	1	5

学年の行の「初」は、4、5月で、数字は、学年。点数の行の数字は、各学年の達成者数。彩色は、成績表1～8と同じ色を使用している。

（2009生と2010生で、4年次に長期留学した学生が3名いた。帰国後、2009生はTOEIC
805点を、2010生2名は、それぞれ770点と725点をあげた。帰国してから科目履修をし
ていないので、表5、表6にはその得点を記入していないが、インテンシブ在籍者な
ので、この表9の合計数には加えた。2008年導入のAO入試は、全合格者30名のうち、
800点達成者が1名、700点2名、600点8名であった。）

3.9 3年後の課題

3年目が終わる頃、それまでの経過を学長裁量研究として報告する機会があった。その途中経過報告については、『学生の資質・能力を高める大学教育の創出』の第9章「インテンシブコースを取り入れた英語教育」（2007年）の4.8節「今後の課題」を参照していただくことにして、執筆時、書き損ねたことをここで追加補足したい。

英語インテンシブの在籍者には、中国語のインテンシブにも在籍した者がごくわずかではあるがいた。2つの言語を集中的に修めるのは至難の業で、時間割上も不可能な場合があり、多くはどちらかを離脱し、英語に残る者もいれば、中国語に移る者もいた。最後まで両方に在籍した者はほとんどおらず、2006年の最優秀者が唯一の例外的存在であったと思う。英語の能力が卓越していたので、英語学習の過重が相対的に軽くなるために、両方を続けることができたのであろうと思う。

教職課程に在籍する者もいたが、こちらも同様に過重負担になり、最後まで両方続けた者はほとんどいなかった。仮に続けることができたとしても、英語学習にかけうる時間が制限されるために、英語の伸びがあまりみられなかったようである。英語と中国語や、教職と英語の両方に挑戦してくれた意欲には敬意を表したいが、あぶち取らずになる恐れもあり、早めの適切な指導が必要であったかもしれない。学習時間の確保に苦労したのは、公務員講座受講者も同様で、成績が伸び悩んだとしても無理からぬところである。

学習態度や姿勢における問題点として、最初の3年間の特徴として、学習に対する、いわば軽佻さが見受けられた印象がある。発信型の授業ということで、コミュニケーションタイプの授業が強調されるわけであるが、その英語レベルは、中学英語で処理できることが多い。学術的に言えば、Cummins (1979) の唱えたCALP（教科学習的で、抽象的な言語能力）よりも、BICS（日常会話的で、具体的な言語伝達技能）に偏っていたということになるのであろう。難しい内容のことを話すのは日本語でも難し

いわけで、それが英語になるとなおさらである。社会や経済問題などに関する会話というのは、抽象性や論理性、学問性を伴い、語彙的にも英語構文的にもCALP的になり、それ相応に難しいのである。

BICS、すなわち易しい英語で十分という意識のせいかどうか、学習に対して軽い気持ちが先行し、コツコツ真面目に、辞書をひきながら学習するというような、語学学習につきもののストイックとでもいう態度が、受験英語への反動もあったのか、醸成されなかったようである。予習復習がおろそかになったり、最も端的に現れたのが試験に対しての姿勢である。試験監督に行くと、テキストを開いて、静かに復習する光景が見られるものであるが、インテンシブの試験では、ぺちゃくちゃおしゃべりしているのである。ある意味嘆かわしいことで、補助監督者に対して、恥ずかしい思いをしたこともある。ある年の、あるインテンシブの科目の試験でのこと、補助監督者が、そういう学生の態度に怒り、叱ったそうであるが、それも当然と言える。確かに、会話ではある程度の「軽薄さ」とでもいうものが必要になるかもしれないが¹⁸⁾、それが語学学習そのものに及ぶとなると問題であったと言える。幸い4年目くらいになると、そういう風潮は消えていったようである。

4. 英語インテンシブ存続について

5年目頃になって、インテンシブの成果が期待されたほどには上がっていないということから、インテンシブが廃止になるという話を持ち上がった。当時、インテンシブの存続を要望するために書いた文書を加筆修正したものを提示する。

¹⁸⁾ 日本を代表する言語学者で、東京外大スラブ語学名誉教授の故千野栄一氏が、語学の神様と言われるS先生に会話がうまくなる秘訣は何かお聞きしたところ、「いささかの軽薄さと内容だな」というお答えだったそうである(『外国語上達法』岩波新書、1986:175)。会話の上達には、軽薄さが求められるということであるが、内容のない会話には軽薄さしか残らないことにもなりかねないことには留意する必要がある。

4.1 存続意義

インテンシブコース（現インテンシブプログラム）設置以前、学内でTOEICを数年間実施したが、600点を超える学生は、唯一の例外的学生を除き、皆無であった。その例外的学生とは、高校時代一年間の留学をした者で、一年次の最初の得点は580点、最後の点数は680点であった。その学生以外は500点台が最高で、当時、一般の学生にとって、600点台は、いわば夢の数字であった。

インテンシブを設置してから5年目の現在、通算で、800点台が1名、700点台が8名、600点台が16名出ており、夢のようであった話が現実になっていることを思えば、インテンシブプログラムというのは大きな意義をもつと思う。

英語を必要とする職業選択（例えば、外資系、エアライン系、国際公務員系など）をする場合、インテンシブに在籍し、英語力を大いに伸ばすという機会が提供される必要があると思う。今年の4年生に、国際物流志望で730点、エアライン志望で610点得点し、夢を叶えた学生がいる。3年生に、国際公務員希望で、730点得点した学生もいる。もちろん、そういう職種で要求される600点や700点といった数字が、即、内定につながったというわけではないと思うが、プラスに作用したことはまちがいないであろう。それだけの語学力があるということと、それだけの努力をする人物であるという評価がなされたはずである。こういう学生は少数派かもしれないが、その他にも、企業から600点以上を求められることは少なくないから、大学として、そういう学生の志望や希望に対応できるプログラムを提供する必要があるのではなからうか。そのためには、インテンシブの存在意義はきわめて大きいと思う。

確かに、全ての学生が満足いくような成績を残しているわけではないが、インテンシブを創設して、我々も初めての経験の中で、暗中模索しながらこのプログラムを運営してきた。それも徐々に軌道に乗り始め、インテンシブのなかった時からすると、大きな成果が出てきていると言える。単位

数を増やしたり、新しい科目を設置したり、離脱者を減らす対策など、さまざまな改善策を、現在実施している最中なので、短期的な成果で判断するのではなく、長期的な視野で教育政策を見守る必要があるのではなからうか。

ただ、TOEICの成果だけでなく、目に見えにくい面での教育効果、例えば、点数にはあらわれにくいコミュニケーション能力や英文読解・作文能力、英語圏における文化的知識、異文化理解の知識の習得などである。また、別の意義として、例えば、40人の学生が、いわば、「同じ釜の飯を食い」ながら、4年間を過ごし、お互い啓発し、切磋琢磨したり、人的ネットワークを構築していくというような効用にも目を向けるべきではなからうか。一旦設置したコース（プログラム）であるから、10年程度は続け、政策の一貫性を維持していただきたいと願うばかりである。

4.2 目標値 TOEIC650点

もし、TOEIC 650点というような目標値に達する学生が少ないからという理由がインテンシブの存続意義を問う理由であるとすれば、この目標値の出所を反省する必要があると思う。2004年晩秋の頃、法人化前年の県立大学検討委員会において、英語教育に関しては非専門家と思われる委員の方々が、本学の学生の学力に関する情報もおそらく無いまま、現場の声にも顧慮されず、単なる希望的観測としか思えない数字を一方向的に掲げたのではなかったか。

英語教員としては、英語インテンシブ設置の数年前から実施したTOEICで600点を超える学生は実質皆無であったため、社会で認知され容認される、ぎりぎりの600点という数字を目標値として提示した。しかし、我々の提案は顧慮されず、650点という数字が一方向的に通告されたわけである。英語が専門の学科と言ってもよい、シーボルト校国際交流学科でさえ、600点が目標値であったから、容認できない数字ではなかったはずである。

600点ということであれば、前年度、20名程度の達成者がおり、割合的

には、シーボルト校の国際交流学科の半分程で、国際交流学科の半分の割合であれば、経済学という専門を修めながらの英語学習であることを考慮すれば、容認可能な数値ではなかったか。中期「計画」ということであれば、確たる論理的根拠のもとに目標数値を出す必要があったと思うが、そういう論拠を示すこともなく、これくらいはほしい、世間体もあるという、単なる思いつき程度の目標値ではなかったか。

さらに、インテンシブ創設直後に、中期計画の文書の中の650点という数字の前に、「全員」という文言をつけてほしいとか（シーボルト校では「全員600点」としているためか）、インテンシブの学生全員に海外研修を必修にしてほしいという、無理難題というか荒唐無稽とでもいう要望が、企画課の方から次々と出されてきた。650点全員については、到底実現不可能であるという理由で、海外研修必修案については、コースへの応募者が激減するという理由で、お断りさせていただいたが、学生の実情をよくご存知でない方々から、思いつき程度ではなかろうかという意見や要望が安直に出されて来たことは誠にもって遺憾なことではなかった。

5年目になって、海外語学研修を全員必修にするという要望が、再度、出てきたのは青天の霹靂としか言いようがない。5年前と同じ理由で固辞したが、5年前の経緯が情報として伝わっておらず、新執行部に替わってから、新たな思いつき案が再浮上したようである。私立大学と違い数年で人が替わり、大学運営上の情報やノウハウの蓄積がなされないのである。同じことが蒸し返され、教育における一貫性が維持継続できないということになりそうである。

4.3 教育政策の一貫性

教育政策の一貫性という点について一言述べておきたい。インテンシブを設置する2年ほど前、本学の事務局長が、入試本部で、当時入試委員長をしていた筆者に、「どうせ、英語をやっても忘れてしまうから、やっても無駄ではないですか」という信じたい発言をされたことがあった。こ

の発言のコンテキストは、当時の入試制度は、センター試験の5科目から高得点の3科目を使うというアラカルト方式で、受験生は受験しやすく、受験生の大量確保が容易にできるから、英語のできない学生が多少入学してもかまわないし、もしかすると、英語教育が低調になっても仕方がないという発想での発言ではなかったかと推測される。

英語教育については、このような無関心とも冷淡とも言える県側の方針であったのが、その2年後には、英語と中国語に特化するという教育政策が打ちだされ、語学教員に対し、インテンシブコースを設置してほしいという要請があった。180度の政策転換がなされたわけである。もちろん、これはこれで英語教員としては、やりがいのある政策であったことは冒頭で述べた。その事務局側が、新構想の中でインテンシブプログラムを廃止するという方針転換を、またもするということであるとすれば、全く納得容認しがたい政策転換であり、成果の見えにくい教育分野での政策の場合、その一貫性をめざす必要があるのではなからうか。

4.4 入試と学力

上述のアラカルト方式の入試制度について、本学の英語教育の流れ、学生気質などを知っていただくため、少し説明の必要があるであろう。この平成11年より実施された入試制度の一年目の入試では、300名もの受験生が受験票を忘れ、仮受験票の発行に時間がかかり、試験開始時刻を30分も遅らせるという、前代未聞の珍事があった。恐らく、科目的に受験しやすいため、受かればもうけものというような、観光気分の受験生が多かったとしか思えない。科目の選び方は、国語と、傾斜配点の社会と理科という選択が多く、この年の流通学科のトップ合格者は、センター試験の英語も数学も受験していなかったと記憶している。(当時の合否判定会議には、全受験生の全科目の点数がのった資料が提示されていた。学生の学力把握にはその必要があり、現在の簡便すぎるものには違和感を覚えざるをえない。) たまたま、その年の生物の平均点が極めて高かったというのも関与

したかもしれない。英語と数学は、大学受験における難関科目であり、その両方とも受験しなくてすむのであれば、怠惰な受験生にとって、これほどの朗報はない。一夜漬けがさく社会と理科、大きな差のつきにくい国語を選択すれば、高校3年の夏休みからでも間に合う入試制度と評された所以である。県内高校側から、改善の要望が相次いだのも無理はない。

英語については、大量の英語不得意者が入学し、当然ながら、大量の再履修者が出たので、1年3クラス、2年3クラス、計6クラスもの再履修クラスを設置する事態になった。再履修クラス編成をするために、506教室があふれんばかりになったのである。優秀な学生が「先生、私にあてないでください。英語ができるとわかったら、村八分にされるから」という身につまされる話まであったと後で聞いたことがある。

学力の低下がモラルの低下につながったのかどうか、学内は荒れに荒れたと思われるでき事が相次いだ。もちろんすべての学生ではなく、底辺あたりに位置する不届き者の少数ということであるが、そういう学生がこの入試で増加したためであろうか。器物損壊、器物盗難、学内・学外の無法駐車、火災未遂事件、校舎内汚物放置事件など、あげくの果てには、刑事事件まで発生した。

AV教室は、入室時土足を脱ぎスリッパに履き替えるが、授業が終了すると、入り口辺りにぬぎちらかしたスリッパが散乱しているという、見るに耐えかねる状況もあった。それは、新しい入試制度が導入されるまで、数年続いたようである。「入試で必須科目にしてもいないのに、何で英語をやらないかん」という抗議の意思表示であったのかもしれない。英語教員のいる方に向かって、唾を吐きかける学生もいたとも聞く。こういう状況の中で、英語圏に姉妹校の大学がないのが恥ずかしいという発言が国際交流委員会でされるのを複雑な思いで聞いたこともあった。

また、地域社会への迷惑行為（夜間の騒音、不法ゴミ出しなど）も少なくなかったようである。英語にtown and gownという言葉があるように、一般市民と学生との間の摩擦や軋轢は、洋の東西を問わず大学町の歴

史的宿命かもしれないが、「こがん大学ならいらん！」という地域住民の怒りの声が本学の学生新聞に掲載されたこともあった。誠にもって迷惑千万な入試制度であったと言わざるを得ない。しかし、当時の事務局長、当然県当局も、そして少なからぬ数の教員も、それを支持していたのではなかったかと思うのである。

5. 語学教育の要諦

5.1 文法と訳読

高校の英語科目から「文法」が消えて久しい。コミュニケーション重視の英語教育へシフトしたためである。確かにコミュニケーション能力の要請は喫緊の課題であるが、文法の重要性がなくなったわけではない。OC（オーラル・コミュニケーション）の代わりに、文法の授業が行われていた高校もあったようで、OCとは文法のことであると誤解していた高校生もいたらしい。

その昔、文法のための文法に堕した授業が行われていたことは残念なことであり、そういうイメージがあるためか、文法悪玉論がまかりとおるというのも迷惑なことである。文法学習を通じて語形変化を学び、文構造を把握することなしには、正確な英文理解はありえないし、通じる英文も表現できないであろう。大事なことは使える英語のための文法指導である。

漢文の訓読法を発明したのは日本人の独創と言ってよいと思うが、英文を漢文のごとく読み下すのも、日本人の独創的所産である¹⁹⁾。江戸の蘭学時代に由来し、わが国の文化遺産とも言える、外国語を正確無比に理解せ

¹⁹⁾ 渡部昇一氏の『英文法を撫でる』（大修館書店、1996: 102-133）に、日本人の言語解剖癖とでもいうものが評述されている。その中で、日本の伝統的文法教育について、韓国人作家の金聲翰氏が「『日本をして今日あらしめたのは口で喋る外国語の能力というより文法のメスで解剖する能力ではなかったろうか』という判断をしている...」というくだりがあるのは、外国人からの視点であるだけに興味深い。渡部氏には、文法学習が民族の知性の開花に貢献するという、文明史的考察もある（『伝統文法の重み』『渡部昇一小論集成（上）』大修館書店、2001）。

しめる訳読法が、明治日本を近代化させ、昭和の経済大国へと導いたことになると思うが、それを軽侮するのであれば、それこそ罰があたろうというものである。

語学学習において、文法学習と訳読法はそれほどの力を発揮するものであるのに、また、西洋のルネッサンス期以来の古典語学習（ギリシャ語、ラテン語）の常道であり、古今東西、語学学習の要として実践されてきたと思うが、コミュニケーション重視策の中で、日陰者のような扱いを受けているのは残念なことである。2003年に実践コミュニケーション能力の育成を柱とする新指導要領が導入され、それ以降、大学生の文法力、そして英語力が低下してきているのは明らかである²⁰⁾。近年、大学の初年時の英語テキストには、文法物や文法を盛り込んだ教材が氾濫している。レメディアルのための教材であり、それだけ基礎力不足が深刻なのであろう。

もちろんコミュニケーション能力が大事なことは言うまでもない。その向上のための訓練も必須である。しかし、文法学習や訳読法という、語学の基本訓練を実践することなしに会話練習だけでは、BICSのみでCALPにまでは至らないためか、結局英語の力は伸びないという報告も多数あることも忘れてはならないであろう²¹⁾。

²⁰⁾ 英語学力低下についての報告・論考は多数あるが、ごく最近のものでは、江利川の「[聞く]「話す」中心の英語教育によって日本人の英語力は高まっているのだろうか。実は、期待とは正反対の調査結果が相次いで報告されている」という悲観的な報告がある（江利川春雄「英語教育史からみた入試英語問題」〔英語青年〕2006年、4月号、15）。また学力低下の一例にわが国のTOEFL最下位転落をあげて、その原因を過激な論題のもとに考察した論考がある（茂木弘道「小学校英語などとたわごとを言っているときか」『小学校での英語教育は必要ない』大津由紀雄編著、慶応義塾大学出版、2005）。さらに予備校関係者からの興味深い提言もある（澤井繁男『誰がこの国の英語をダメにしたか』生活人新書、NHK出版、2001）。伝統的な教授法の軽視が学力低下につながったという見方もある（上西俊雄『英語は日本人教師だから教えられる』〔洋泉社、2004〕）。

²¹⁾ 斎藤兆史『日本人と英語』（研究社、2007：188）で、「高度なコミュニケーションを図ろうとすれば...まずは、文法・読解の基礎を築いてからその運用の能力を育成していくのが正しい手順であり」と言っているのは、正論のように思える。他にも、大津由紀雄編『学習英文法を見直したい』（研究社、2012）、菅原克也『英語と日本語のあいだ』（講談社、2011）、鳥飼玖美子『本物の英語力』（講談社、2016）、ガイ・クック〔斎藤・北訳〕『英語教育と「訳」の効用』（研究社、2010）、杉山幸子の「文法訳読は本当に「使えない」のか?」（『日本英語英文学』2013：105-128）など多数ある。

また、高校の指導要領で、「授業は英語で行うことを基本とする」とあるが、文法や語法、英文の背景知識などに関する煩瑣な説明をし、難解な英文を緻密に理解するためには、日本語の助けを借りた方が学習効率上がることは経験的にもわかる。教える方にも、教わる側にも過度の負担がかかり、その効果も怪しいのが、現指導要領のような気がする。文科行政への抗議と批判のためか、文法学習や訳読法の効用についての考察が、近年、学術的に多数されてきているのはもっともなことであると思う。

5.2 コミュニケーション能力養成の難しさ

外国語を学習する以上、誰でも、いわゆる「ぺらぺら」になりたいという願いは同じであろう。筆者も長年、その一念で英語学習や英語の研究に精進してきた。ただ、コミュニケーション能力だけが、語学における能力ではないことは確かである。コミュニケーション能力と読み書きの能力は別々のものではなく、表裏一体であるということを改めて強調しておきたい。

コミュニケーション能力を議論する際に難しいのは、学力や学習努力以上の何かがそれに関わってくることである。性格的に積極的に話し好きという人は、控えめで口数の少ない人より、コミュニケーション能力の上達が速いことは、経験的にも観察されるし、そういう研究もされているであろう。前者の者だけを集めることは不可能であるし、後者の者は、コミュニケーションクラスでは肩身を狭くするということにもなりかねない。また、女子と男子を比べれば、この年代の人たちのコミュニケーション能力の優劣は歴然としている。

「沈黙は金」「以心伝心」というような日本独特の精神文化に根ざす国民性とでもいう性癖があり、日本人のコミュニケーション能力の向上に大きなハードルともなっている²²⁾。日本語でもしゃべらないのに、英語でしゃ

²²⁾日本の英語学の大御所、故中島文雄氏も「(日本人は)ことばによって何でも表現しようとする意欲がよい」と学術的見地から述べている(『英語の時代に生きて』研究社, 1990: 176)。

べれるのかというような議論である²³⁾。

さらに、読み書き能力とコミュニケーション能力とが、複雑に錯綜する面がある。コミュニケーション志向の強い者、得意な者は、読み書きを厭う傾向があるようである。逆に、読み書きの得意なものには、コミュニケーションに距離を置きがちになりやすい、ということも見られる。両者そろえば申し分ないが、神は二物を与えずというのが現実である²⁴⁾。

コミュニケーション能力養成では、実技的要素が強いので、教室の中だけでの訓練では限界があり、実践的に使うという環境作りが必要になる。体育や音楽の授業だけでは、それをいくら増やしても、国体選手やコンクールに出るような音楽家を養成するのは到底不可能というのと同じ理屈である。

こういう、学力以上の何かが絡んでくるところで、コミュニケーション能力の向上をめざすには困難を伴うようで、1988年の学習指導要領が「コミュニケーション指導要領」とでもいわれる指導要領でありながら、その指導要領で学んだ大学生の英語力が低下しているという報告がされているのは、納得できる気がするのである²⁵⁾。

5.3 母語話者主体のカリキュラム

母語話者を主体にしたカリキュラム案が議論の俎上に乗ることがあるので、それについて考察したい。コミュニケーション能力を養成することは、語学教育の基本中の基本であり、その重要性をいくら強調してもしすぎることはない。文科省の「英語を使える人材の育成」という言語政策にある

²³⁾小説家の村上春樹氏も話すことは苦手と思しく、外国語学習における、日本人としての、あるいは性格上のハンディキャップとでも言うものに言及している（『やがて哀しき外国語』講談社、1994: 164-175）。

²⁴⁾長崎通詞は代々オランダ語の会話に長けた家柄であるが、オランダ語を読む力には乏しかったようである（渡部昇一『英文法を撫でる』講談社、1990: 127）。イタリアに10年在住した日本女性が、イタリア語の会話はできるのに、新聞は読めないから、新聞が読める澤井氏がうらやましいという話で紹介されている（澤井繁男『誰がこの国の英語をダメにしたか』生活人新書、2001: 85）。

²⁵⁾緑川日出子「大学生の英語力と到達目標」『英語青年』2004年12月号。

とおりである。しかし、コミュニケーション能力の養成だけが語学教育のすべてではない。読み書きする力も大事であることは言うまでもないことはすでに述べた。専門的学術文献とか、文学作品というような高度なレベルの話ではなく、新聞や雑誌、インターネットの記事、通信文や文献資料を読んで情報を収集獲得し、eメールや手紙を書いて通信伝達することは、コミュニケーション能力と同様に、あるいはそれ以上に、社会で英語を使って仕事をしていくうえで、大事なことである。さらにそういう読み書きできる力が、より高度なコミュニケーション能力に繋がっていくのであろうと思う。

このことは、多くの英語教育者や有識者の指摘するところである。鈴木孝夫（元慶大）、成田一（元阪大）、大津由紀雄（慶大）、菅原克也（東大）、斎藤兆史（東大）、鳥飼玖美子（立教大）、明石康（元国連）など、その視点の論陣を張る識者は枚挙にいとまがない。同時通訳者でもある鳥飼玖美子氏が、仕事をする上では、読み書きの能力の方が、会話の力よりも大事だと、ご本人の経験から言い切っているのは意義深いと思う²⁶⁾。

読み書きの授業だけでは、明治以来の旧態依然とした英語教育と変わらないという批判や、かといってコミュニケーション主体の授業だけでも、必ずしも成果があがっていないという指摘や報告がある。4技能を、バランスよく養成するような語学教育が大事なのである²⁷⁾。

母語話者は語学教育においては、必要不可欠な存在であることは言うまでもない。しかし、すべての大学において、母語話者中心の語学教育が成立するというわけでもあるまい。本学と学部構成的にも、学力的にも類似したレベルにある青森公立大学では、二十数年前の設立当時、英語の授業は、すべて母語話者が担当し、一人の日本人教員がコーディネートをするというカリキュラムであったが、教育効果があがらなかったためか、現在は日本人と母語話者とが分担して指導にあたるカリキュラムを組んでいる

²⁶⁾ 鳥飼玖美子『危うし！小学校英語教育』（文春新書、2006）。

²⁷⁾ 詳しくは、『学生の資質・能力を高める大学教育の創出』194-195参照。

ようである。

外国に例をとれば、ラオスでは国際会議で英語の話せる人材を育成するために、母語話者をアメリカやオーストラリアから導入したらしい。しかし、思った程の成果があがらず、「英米人とは文化も思考方法もちがいが、英語習得に苦労したにちがいない日本人の英語教師」の派遣要請がされたという、うそのような話も報告されている²⁸⁾。やはり英語と日本語の構造の違いを熟知し²⁹⁾、生徒、学生の間違いやすい点、習得しにくい点などが経験的にわかり、さらに学生の心理にまで無理なく感情移入できる教員の存在が必要ということであろう。

非専門家の中には母語話者信仰とでもいうものがあり、母語話者に習えば、上達が早いという幻想を抱く人が少なくないようであるが、青森公立大学やラオスの例を見ればわかるように、母語話者だけでうまくいくものでもない。母語話者と日本人教員とが協同、補完し合って、教育にあたるのが大事なことではなかろうか。

5.4 TOEIC とは何ぞや？

TOEICはTest of English for International Communicationの略である。要するに、国際ビジネス環境での英語のコミュニケーション能力を測るテストということになる。しかしながら、そのテストは本質的に問題を包含しているのではないかというのが、筆者のみならず、多くの識者の思いではなかろうか。というのは、TOEICの学力測定の仕方は、リスニングとリーディングという、英語の受動能力の測定を通じて、能動的な力、すなわち発信力を測ろうとするものだからである。

もし、受信力と発信力に、100%の相関関係があるとすれば、TOEICによって正確な英語の発信力が測れるであろう。しかし、相関関係が存在す

²⁸⁾ 澤井繁男『誰がこの国の英語をダメにしたか』生活人新書(2001: 121)。

²⁹⁾ 「母語をてがかりとし、母語とのこまやかで綿密な参照・対応関係を駆使しながら第二言語を理解せざるをえない」という澤井(同上, 121-22)の説は卓見であると思う。

るわけではないということは、TOEICの成績が良くても、実際のコミュニケーション能力がそれに伴っていなかったり、またその逆も往々にしてあることからわかる。本学の学生でも、仮に700点に達しても、実際の会話力はそれに伴っていなかったり、会話は上手いのに、TOEICは伸びないという例も散見された。

東大教授菅原克也氏が「TOEIC...の点数が一人歩きする状況が見られる...試験で高得点だからと言って、実際のコミュニケーションの場で期待される能力が発揮できるとは限らない」と仰るとおりである(『英語と日本語のあいだ』, p.6)。鳥飼玖美子氏もまったく同じ主張で、さらに、TOEICが「ビジネスの場における人間力や仕事力を測るわけではないので」、高得点がビジネスでの成功につながるわけではなく、「経済界にはそれをわきまえて使っていただきたい」と苦言を呈する(『本物の英語力』, p.111-14)。点数は良くても、コミュニケーション能力がそれに相応していなければ、そもそも何のための試験かということにもなりかねない。

英検には、級ごとに難易度の異なる試験が行われるが、TOEICの場合、英語の専門家も大学生も同じ試験を受ける。専門家には適切な質と量の試験であっても、多くの大学生には難易度的にも、量的にも無理がある。実際に英語を使い、800点以上の確かな英語力のあるビジネスマンには、TOEICは有効な試験であると思うが、学生であれば、400~500点レベルでも四苦八苦する試験である。ましてや200~300点レベルの学生にとっては、試験の後半はお手上げで、試験時間のかなりの部分を無為に過ごすということにもなりかねない。それでは、試験というより難行苦行でしかなく、克己心を養う精神訓練にはなっても、英語力を伸ばすという観点からは愚行でしかないように思える。学生の自信ややる気を失わせ、英語嫌いに拍車をかけることになりはしないか。試験時間が半分の難易度的に易しいTOEIC Bridgeの有効活用を考えた方がよさそうである。

内容的にも、求職情報や社内通知、欠陥商品の返品やレストラン紹介など、情報理解や伝達を主とするものであり、ある意味、無味乾燥な英語で

ある。そういう英語の必要がないわけではないが、知が啓かれるとか、心が豊かになるというようなものではない。要するに、人間形成が教育の主たる目的とするならば、それとはかけ離れたところにあるのがTOEICの英語ということになりそうで、大学生が受験するには不備を抱えた試験がTOEICであるということは認識される必要があるだろう。そのうえで、この試験を有効活用する方策を求めべきであると思うが、ただ闇雲に、点数アップだけに執着するというのでは、本当の英語力とは何かという根源的な問題を忘れていないことにならないか。

TOEICは、就活万能薬でもないし、国家試験のように、将来を保証するものでもない。それだけに、TOEICを崇め奉る風潮には、いささかの疑念を抱かざるを得ない。宇都宮大学の英語教育改革の成果が、大学英語教育学会賞を受賞したことはすでに述べたが、TOEICを必ずしも重視していないこの教育実践が賞を受けたことは、現在の大学の英語教育にとって大きな警鐘となるであろう。

なおここまで、「英語力」という概念については、それが何を意味するかを定義づけることもなく、日常的な意味で使ってきたが、英語教育の本質と、それゆえ英語教授法にも大きく関わってくる重要な問題であり、それについて考察する文献は多数ある。山田雄一郎『英語力とは何か』（大修館書店、2006）、大谷泰昭『日本人にとって英語とは何か』（大修館書店、2007）、成田一『日本人に相応しい英語教育』（松柏社、2013）、菅原克也『日本語と英語のあいだ』、鳥飼玖美子『本物の英語力』など、学校行政を含む英語教育関係者には必読の文献ばかりである。

6. 新カリキュラムの検証と比較

2013年から、英語インテンシブに替わる形で、新しいカリキュラムが導入された。主たる特徴は、全学生が最大20単位まで履修できること、1年次、必修として週4回の授業があること、そのうち2回は、TOEICを主

体にした授業であることなどである。科目は、TOEIC 指導の「英語演習 I～Ⅶ」(文法、語彙中心)、「英語演習Ⅱ～Ⅷ」(リスニング、リーディング中心)、「リーディング」、「オーラル・コミュニケーション」、「ライティング」、「カレントイングリッシュ」などである。英語インテンシブとの比較のための検証であるので、学力別クラスの上級クラスに在籍する学生約100名を対象に考察する。以下、年度ごとに説明していきたい。

6.1 2013年

1年次における受験回数は、経済35回、地域30回、流通32回(数字は延べ数)。受験者の最高点平均は経済476、地域473、流通449である。2年次の受験者数は24名、延べ受験回数は31回。最高点の平均点は480点。受験者のうち8名の成績が下降している。3年次に数名が受験しているが、目立った成績は上がっていない。

最終的に、600点達成者は8名で、学科別内訳は、経済6名、地域2名である。600点達成者のうち6名は1年次であり、2年次以降になると、新たに600点に到達した者は2名しかいない。ましてや、700点以上達成者はまったく出ていない。

1年次から、600点達成者が6名出たので、その後の飛躍が期待されたが、2年次になると、意欲や動機が減退したのか、継続してTOEICを受験する学生が少ない。成績もあまり伸びずに、むしろ、下降した学生もいる。2年次以降の学習、指導体制がうまく機能していないということになりそうである。

そもそも、2年次になると、選択科目を履修する学生については、各教員が、自分の教えるクラスでしか把握できず、総体的に指導できるような体制ではない。多くの大学で実施している副専攻制を導入し、20単位取得した者に対して副専攻として認めれば、意欲や動機づけを強化できるし、教員としても、学生とより関わりのある指導体制がとれたのではなかろうか。

6.2 2014年

1年次の受験回数は、経済45回、地域11回、流通34回（数字は延べ数）。受験者の最高点平均は、経済423、地域426、流通428。600点達成者は4名で、いずれも流通の学生である。2013年の1年生に比べ、1年次の平均点は、経済、地域で50点ほど下がっている。前年との学力比較をプレイスメントに使ったTOEIC Bridgeですと、2013生の平均点がやや高く³⁰⁾、入学時の学力が関与しているようである。

2年次は、受験回数25回、平均点は、427点である。700点どころか、新たな600点達成者は一人もいないし、2年次になって大きな伸びを見せた学生はほとんどいない。2年選択科目の履習も全体的に低調であり、2年次の学習、指導体制に課題が残るということになるであろう。

6.3 2015年

上級クラスの受験が少ないので、中級クラスも考慮に入れる。受験回数は、経済上級5回、中級80回、地域上級2回、中級20回、流通上級16回、中級38回（数字は延べ数）である。600点達成者はおらず、最高点は540点である。400点未満が多いのは中級の受験者が多いからと思われる。上級クラスの受験が過去2年と比べると、著しく少ないのが気かりである。毎年同じように受験を促してはいるが、入試の成績が下がっていることに起因するかもしれない。2年次の選択科目の履修者数が年々減っていることにもそれは伺えるが、過年度並みの上級受験者がいれば、もしかすると600点達成者は出ていた可能性はある。指導力を問われてもしかたがない結果である。

次ページの表は、新カリキュラムにおける、年度ごとの100点刻みの達成者数を示す表である。500点台はうす緑、600点はうぐいす色で色分けしている。

³⁰⁾ TOEIC Bridgeの上級クラスの得点分布: 2013生は、経済166～140、地域168～138、流通160～138; 2014生は、経済154～132、地域156～138、流通158～132。

表10 新カリキュラム (2013~2015)

学年	2013			2014		2015	計
	1	2	3	1	2	1	
800	0	0	0	0	0	0	0
700	0	0	0	0	0	0	0
600	6	8	8	4	4	0	12
500	16	21	25	2	4	3	32
400	44	48	55	20	32	30	117
300	9	9	15	15	29	59	103
200	3	3	3	3	4	16	23

6.4 今後の課題と展望

6.4.1 科目認定制度の問題点

初年度、科目認定上の問題が発生した。TOEICと英検を主に、単位認定する制度を作ったが、英語教員が安易すぎると反対した英検2級までその対象としたため、前期の週4回の授業のうち、2回（「英語演習」2科目）の授業が免除された学生がかなりいた。英検2級取得は高校生にはそれほど難しくないからである。1年前期の、学習習慣を形成しないといけないきわめて大事な時期に、週4回の授業のうち2回が免除され、朝がっらい1時間目の受講もなく、学生を怠惰にするだけの方策でしかなかったと言わざるをえない。この制度を利用した、優秀なはずの学生のその後は順調というわけでもなかったようである。また、この制度によって、高得点、例えば、700点以上を生み出すということもなかった。不合格になった科目の再履修を避けるために、600点達成を目指した学生もいたが、それでは制度の誤用と言えまいか。これも成果主義という、教育を事業としか考えない発想からではなかったか。

科目認定制度は、所詮、ファーストフード教育としか言いようがないように思う。おふくろの味ではないのである。旨くありさえすれば、滋養はなくても、健康を害してもかまわないということになりかねない。授業に

出なくても単位がもらえるわけであるから、ある意味、英語の授業などどうでも良いと公言しているようなもので、英語教員を軽侮した策であり、教育を放棄した政策と言えなくもない。それが教育の場で認められてよいのかどうか、はなはだ疑問に思わざるをえない。

6.4.2 学生に裨益するカリキュラムか？

2年次になると、不特定多数の学生を相手にしているので、学生まかせになり、担当クラス以外で、選択科目を履修する学生の把握もできず、高得点達成のための指導が難しくなっている。シーボルト校の国際交流学科のように、英語を中心とした学科で、20単位が必須ということであれば、成績の向上は期待できるであろうが、経済学部で、経済学や公共政策というような専門科目を学びながら、また選択科目の履修も学生まかせの中では、期待するほどの成果をあげることは難しいようである。(但し、海外ビジネス研修に参加する予定の学生は、英語が必要な状況に直面することから、強い動機を備えていると考えられるので、成績の伸びが期待され、600点以上達成者が出ているが、授業単位数以外の、ベルリッツによる特別講座を受講しているので、この検証の対象に入れない。)

必須8単位以上20単位までの履修を希望する学生を、何らかのグループに取り込んで指導する方策が必要であり、副専攻の制度などが有効であると思われるが、実現に至っていないのは遺憾なことである。

このカリキュラムの目標として、「TOEIC 600点以上50人」が掲げられた。英語教員は懐疑的な目でこの目標を見てきたが、現実はそれに遠く及ばない実績しか出ていない。高すぎる目標が果たして妥当かどうかということは英語学習に限られた話ではなく、例えば、国家公務員上級職の合格者が何人出るとか、東証一部上場企業に何人採用されるかということを考えれば、本校で期待される数字というものは、おのずからわかってこようというものである。その理想と現実のギャップの把握も不十分のまま、教育政策を作り、それを遂行することには多大な無理が生じることはわか

りきったことである。

このカリキュラムが、中級や初級クラスの学生に効果をあげているかどうかも考えないといけない。週4回の授業を消化吸収し、それを英語力向上につなげているかという点、その点でも否定的な答えしか出て来ない。授業を何とかこなしているだけの学生が多数のようであるから、それが効果を生み出しているとは言い難い。TOEICの成績にも、それはあらわれており、500点はおろか、400点をあげるのも難しいようである。

週4回の授業が有効なのは、上級レベルの学力があり、2年次の選択科目をさらに継続履修するような場合であって、過半数以上の学生には、重い負担にこそなれ、有効な策にはなっていないのではなからうか。2年次以降の選択科目を履修することがなければ、1年での週4回の授業の意味はまったく薄れてしまう。8単位しか履修しない学生にとっては、1年次に3回、2年次に1回（あるいは、1年次2回、2年次2回）というような履修の仕方の方が効果的であるということは、経験的にもわかるし、研究の裏付けもされ、英語教員の共通認識であると思われる。

語学能力は、単にスキル向上という単純な話ではない。文化情報や社会的知識が必要である。一般常識や教養、専門知識、人間関係力などと絡み合って、いわば複雑系の中で醸成されていくものであると思う。一年次にたくさん授業を揃えたからと言って、それが即、学力向上につながるとは限らないであろう。初習言語の初年度集中は効果があるかもしれないが、すでに6年間の英語学習歴があるなかでの短期集中が有効かどうかは、筆者の外国語学部での経験や学生の観察履歴からすると、疑問が残る。

色々な意味で、まだ未経験で未熟なところのある一年生にとっては、教材内容を咀嚼し、吸収する、いわば学習スポンジとでも言うものがまだまだ小さいからである。学年があがるにつれ、学習能力や学習方略の向上、一般常識や専門知識量の増大、社会経験や人的ネットワークの構築による人間関係力などが増していくにつれて、その学習スポンジも次第に大きくなり、咀嚼力や吸収力が増し、語学の能力も、それに比例して向上するの

ではなかろうか。

学生の中にも、漫然と1年、2年過ごした者でも、ふとしたきっかけで、英語学習に目覚め、一念発起、頑張り出す者も中にはいる。勤勉に学習する者でも、2年、3年と継続しなければ、表面的な数字以上の効果はあがらないのが語学学習であると思う。石の上にも三年と古人の言うが如く、時間がかかるのが語学の習得なのである。成果を急ぐのではなく、長期的視野での教育指導の方策が求められるのではなかろうか。

6.4.3 最終評価

いろいろ問題点を包含するカリキュラムであり、その検証は、英語インテンシブのヒアリングのように、当然しなければならなかったであろう。2018年の学部学科改組によるカリキュラムの改善策も考えないといけないので、2年目の12月に、その検証をするためのヒアリングの開催をお願いしたが、結局開かれることはなかった。英語インテンシブのヒアリングが、(中国語もそうであったようだが)、あれほど熾烈なものであったにもかかわらずである。

2013生は、1年次に600点が6名も出るというような学力の高い学年であったと思う。インテンシブの経験から言えば、700点はおろか、800点が出てもおかしくはなかったかもしれない。なぜ、出なかったかと言えば、2年次以降の指導体制が学生まかせになり、教員の目が届きにくかったり、ある程度の拘束がなかったからであると思う。きめ細かな指導をするために、例えば副専攻制を創設し、グループに取り込んだ指導ができればまた違った結果になっていたかもしれない。副専攻制度は多くの大学で実施されており、カリキュラム作成時にシーボルト校教員が提案して以来、その創設を何度も訴えたが要望が聞き届けられることはなかった。もし、創設されていれば、学生に裨益するものになったであろうと惜まれる。700点や800点に到達する能力がありながら、新カリキュラムの中でそれができなかつたとすれば、もしかするとそれは、制度の被害者と言えなくも

ないかもしれない。

また、教育政策における責任体制という点からすれば、それは不分明なところがあるようであるから、政策が成功裏に遂行されるかどうかとなると、望みにくいところがあるのではなからうか。というのは、もし実施した政策や事業において、責任が発生するとすれば、当然、政策の立案とその遂行において、周到かつ慎重にならざるを得ないであろうが、もし責任が転嫁できるとすれば、慎重を期す必要がある政策でも、強引に実施しかねないということもありうる。万一、失敗しても責任を問われることはないからである。文科省のゆとり教育が良い例で、日本という国家の屋台骨を揺るがしかねない政策でありながら、その責任の所在は明らかにされたのであろうか。大きな政策や事業を計画し実行するのであれば、全責任を被るくらいの気概がなければうまくいくはずはないし、そもそも着手すべきではないであろう。

最後に、新カリキュラムを評価するならば、5段階評価の2くらいではなからうか。3年間で、600点が12名、700点以上はひとりもないということであれば、英語インテンシブとの比較の中では、相応の評価であると言わざるを得ない。英語教育の非専門家の方々がその骨格を作ったカリキュラムであるから、それも宜なるかなというものである。

7. まとめ

2005年に始まり、今年度で終了する英語インテンシブの成果の検証と、そこから得られる将来展望について考察し記述した。各年度の全学生の成績を提示し、仔細に見てきたが、成績表を見ていると、一人ひとりの学生の息使いさえ聞こえてきそうである。点数の動きから、嬉しさや喜び、苦しみや辛さという心の機微も感じられる気がする思いである。順調に伸びた者、上昇下降を繰り返す者、低空飛行を続けた者、何となく在籍することに満足した者、いろいろなタイプの学生がいた。目的意識が高く、学習

時間も多く、頑張る者は、順調に成績を伸ばすことは誰にでもわかる。逆に、ただ在籍することに満足しているだけの者もあり、当然、成績の向上は望めない。教職や公務員志望者も、英語の学習時間が限られてくるため、どうしても数値的な伸びは難しくなる。そういう中で、真面目に、勤勉にやっているようであるが、それでも伸び悩むという者もいる。一見やっているようだが、客観的に見るとそれほどでもないとか、学習方策が効率的でないとか、口語英語に対して適性が弱いとか、いろいろな理由があるであろう。英語教員にも原因がわかりにくいし、本人にとってはなおさらそうであったかもしれない。

伸び悩んでいたある女子学生に、思わず「つらかろうね」と声をかけたら、目にうっすら涙を浮かべたことを思い出す。本人としても、勤勉にやっているつもりであるが、ほとんど成績が伸びないから、真面目なだけにさぞかし辛かったのであろうと思う。只むやみに、点数アップの号令をかけるだけでは、こういう学生の気持ちをいたずらに逆なですることになるのかもしれない。教育畑にいる者が自戒しなければいけないことであると思う。

就職についても、700点を取った学生がなかなか決まらずに、逆に500点にも届かない者が良い就職口に恵まれた事例も少なくない。TOEICが学生の就職を保証するわけでもないし、将来を約束するわけでもないことは、英語インテンシブの10年を通じて、身に染みるほどわかった。ただ、これは、TOEICの価値を否定するということではない。就職戦線で要求されたり、今はそうでもないかもしれないが、将来必要になる学生もいるであろう。やはり必要なのであるが、節度をわきまえてやるということが大事なのではなかろうか。

英語教育にかかわらず、教育というものは、結局、人間教育であり、人間形成に資するものでなければならないことは、教育に携わる者には自明のことである。その当然のことが、成果を求めるあまりに見えなくなってしまうのでは、教育職に従事する資格があるのかどうかということにもな

るであろう。長い目でみて、学生一人ひとりの英語力を高め、また人間形成につながる英語教育を目指さなければならないことになると思うが、昨今の成果主義という、金箔を施したようにしか見えないものをありがたがる風潮は、小保方女史の例が雄弁に物語っているように、おいそれとは是正できないかもしれない。それだけに、真の教育を目指す道は険しいものになるであろう。つけ焼き刃でない、実のある教育とは何かということ、教育に従事する者は、真摯に誠実に考えないといけないし、すぐに成果が期待できるとは限らないのが教育であるということも頭の片隅にでもおいておかないといけないであろう。

最後に、この十年、英語インテンシブで、英語が好きでまた得意な、大勢の様々な学生と接し、英語指導を含む教育活動に従事することができた。教師の本懐と言うべきか。英語インテンシブ373名の学生諸君と一緒に過ごすことのできたこの十年間の冒険航海の旅は苦難の旅ではあったが、それだけに楽しく有意義な旅でもあった。心より感謝申し上げます。